



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第869回
戦争危機の中、大阪破壊！万博・IRの危険

桜 R6/8/5

パネリスト：

あんどろ裕（前衆議院議員）

出原秀昭（大阪府貝塚市議会議員）

稲垣秀哉（新党くにもり関西代表・くにもり衆兵庫代表）※スカイプ出演

川端祐一郎（京都大学大学院准教授）※スカイプ出演

桜田照雄（阪南大学経営学部教授）

室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「今晚は」

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第869回目の討論となります。皆さん、ご存じのようにイスラエルでは今日、明日にもイランの報復攻撃が始まるということでネタニヤフ首相は、そういうことになれば、また手痛い打撃を与えると。仕掛けた方がやられたら俺もやるぞ、みたいなことを言っている。実際、戦争の危機が大変、高まっている中で、オリンピックが行われております。これが今の世界だ。その中で、やっぱり万博の準備も、続けられている。

本当に間に合うのかとか、危ないんじゃないかとか色々言われておりますけれども、実際問題として工事は一応、進んでいると言われております。ただ、内容は、じゃあ、アメリカはどんな催し物をやるのかとかイギリスは、どういう風にやるのかとか全く知らされていない。

こういう中で一部、これはフリップですけども、ここに色々パビリオンの説明がありまして、こういうことをやる予定だという形で色々発表はされているんですね、はい。こういう形で、ドイツ・パビリオンとかイタリア・パビリオンというように一応、一部だけは、こういう形になっているんですね。

ところが、じゃあ、この下の方を見て下さい。吉本 waraii myraii (ワライ ミライ) 館とかね。こういうような計画は出ているんですけど、じゃあ、もう270日を切っているのに、どんな内容なんですかっていうことは一切、発表されてない状況です。そして、こういう形で計画されている訳です。これは上から見た画ですけども、そして沈むんじゃないかっていうものについては、こういう説明をしているんですね。

これはイタリアから来た技術みたいですけども、浮かせる工事。普通は杭を打って、ちゃんと土壌を安定させるんですけど(失笑) そうじゃないんだと。こういう浮かせる形で頑張ると言うんですけどね。本当に、こういうことが、ずっと続いていると。これですね、はい。質問については、基礎形式として浮き基礎を推奨。2.5m程度を掘削することで浮き基礎での建築が可能になると。だから杭の基礎とする場合は杭の引き抜きが可能な工法とするって、実はIRの方では、こういう杭打ちをやっているんですけども、とにかく、そういう形で、でっち上げようとしていることだと思います。

また細かく出るとは思いますけれども、こういう状況の中で、今日のニュースでは、IR工事もやっているんですけども、現実には、万博の委員会の方から、万博の開催期間中は音の問題とか色々あるので工事を中断してくれという申し出があったんですけど、吉村さんは、いや、それは認められないということですけど、これも、また皆さんから、ご指摘があると思います。

こういうことをやって、じゃあ、音の問題だけかというのと、工事をやっていますからトラックとか色んな車両が入りしなきゃいけない。そうすると万博の夢洲に行く道がトンネルと橋の2本しか無いそうですから、渋滞するんじゃないかと言われていたのに、その工事の車両も入ってきたら大変なことになるんじゃないかと。

それから、もう一つは具体的に事故とか台風、大水、或いは地震が起きた時、本当に大丈夫なのかと。耐震性とか大丈夫かって言うと恐らく大丈夫じゃないと思います。11メートル上げたとかって言っているんですよ。ところが、その想定が何処の高さからなのかとかね、色々計算すると。そして、今、南海トラフの問題を考えた時、例えば、津波の問題もあるし、津波が来ないまでも、そこが閉ざされて倒れるとか、救う時、じゃあ、その細い道が中断したら一体、どうなるんだとか具体的な事が色々と危惧される訳ですけど、これは出席者の皆

さんは色々ご意見をお持ちの方なので、お話を伺いたいと思います。

ちょっと長くなりましたけども、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、阪南大学経営学部教授の桜田照雄さんです。宜しくお願いします」

桜田「はい、宜しくお願いします」

水島「前衆議院議員のあんどう裕さんです。宜しくお願いします」

あんどう「はい。宜しくお願いします」

水島「大阪府貝塚市議会議員の出原秀昭さんです。宜しくお願いします」

出原「はい。宜しくお願い致します」

水島「室伏政策研究室代表、政策コンサルタントの室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「そして、今日は、お二人がスカイプの出演でございます。まず京都大学大学院助教の川端祐一郎さんです。宜しくお願いします」

川端「宜しくお願いします」

水島「そして、新党くにもり関西代表、くにもり衆の兵庫代表の稲垣秀哉さんです。宜しくお願いします」

稲垣「宜しくお願いします」

水島「はい。稲垣さんとは、くにもりという番組で、この万博の問題を色々やってきておりますけれども、撮影にも行って貰ったりしているので、後程、お話を伺いたいと思います。さあ、皆さん、万博がそういうような状態で、あと270日ぐらい切ったところにいます。本当に真面に出来るのか。或いは、IRの工事がぶつかるといった問題が起きている。

それから当初2千数百億とか言っていたものが1.1兆円ぐらいかかる。更に万博大臣の話だと、外部インフラを入れたら11兆ぐらいかかるって、ちょっと待てよと（失笑）。一体、どうなっているんだというようなことでありますけども、そういう中でも、また、こういう声が出ているのは、今、能登半島の人々が非常に苦しんでいるのに工事車両とか何か含めて、もうちょっと向こうにも回せないのかと。

万博の方は中断するとか延期しても良かったんじゃないかっていうことが随分前から色々出ていましたが、今、強引に進んでいます。皆さんのご意見を聞いてみたいと思います。それぞれ、こういう立場で考えているっていうことをお話し戴きたいと思います。じゃあ、桜田さんからお願いします」

桜田「僕は万博を今からでも止めた方がいいという考え方を持っているんですけども。まあ、全体としての感想は、やっぱり、いい言葉で言えば誠実さに欠けるというね」

水島「うん」

桜田「まあ、言葉、悪く言えば、胡散臭い」

水島「そうですね。全くそうですね（笑）」

桜田「胡散臭い」

水島「はい」

桜田「色々な計画もそうですし、それから、一番、典型的なのは、まあ、解り易い話をする
と、大屋根の建設がありますよね」

水島「はい」

桜田「あれ、355億円って言っている」

水島「はい」

桜田「面白んだけど、今、集成材は一体、市場で、どれぐらいの値段で取引されているのか
というものが毎月、出るんですよ」

水島「ああ、なるほど」

桜田「それを計算してみるとね、やっぱり、せいぜい30億。なんぼなんでも50億って
いう金額が出て来るんです」

水島「ああ」

桜田「そうすると、材料費がその程度のお金であったら、いくら何でも200億とか250
億ぐらいで済むんじゃないかというのが専門家の人達の意見な訳ですね」

水島「うん」

桜田「そうすると、その100億、150億は何処に行ったんやっていう話になって来ると」

水島「全くそうですね」

桜田「これは面白いんだけど、あの工事でゼネコンの皆さんが、もう、きちんと採算が
取れるっていうのは大屋根工事ぐらいだと」

水島「ああ」

桜田「あとは、みんな、出血だっていう話で、必ずしも儲かるような商売をしていません
というのが、あの業界の皆さんの言い分ですね」

水島「はい」

桜田「もう一つは、大阪のヘルス・パビリオンっていうのがあります」

水島「うんうん」

桜田「これは米麴の事件で問題になった小林製薬」

水島「はい」

桜田「あそこの機能性食品ですね」

水島「はい」

桜田「機能性食品の規制緩和を狙いながら、万博での様々なデータ集めをして、それを商売に繋げるっていうことをやる訳ですね。そうするとね、一言で言うと、その博覧会、万博というのは、70年万博は文化というものを前に出したものですね」

水島「うん、そうでしたね」

桜田「ところが、それが今、もう維新の人達の政治的なイベントになってしまったという、で、それが盛り上がりがない一番、大きな理由じゃないかなと思っています。また、今日は、ひとつ、宜しくお願いします」

水島「はい。お願いします。『胡散臭い』って、正に言い得て妙というかねえ（笑）」

桜田「（笑）」

水島「胡散臭いって本当に最初から現在まで、ずっと続いていますよね」

桜田「ええ。まあ、メタンガスは無臭ですけどね（笑）」

水島「なるほど（笑）。はい。これはリアルですけど（笑）、あんどーさん、お願いします」

あんどー「はい。前の万博は1970年で、あの時、私は5歳で、♪こんにちはあ、こんにちはあ〜♪って何か楽しそうな音楽でね」

水島「そうですね」

あんどー「私は行きませんでしたけれども、何か明るい凄く楽しそうなイメージがありますけど、今回の大阪万博は誘致が決まった時、私は心の底から悔しかったですねえ」

水島「ああ」

あんどー「もう落選することを心から願っていましたが（笑）、あそこで万博さえ取らなければ維新の会は終わっていたと思うんですよ」

水島「なるほどねえ」

あんどー「うん。維新の会が息を吹き返す一つの大きなきっかけになったのが、万博誘致成功だったと思うんですよ」

水島「そうですねえ」

あんどー「だから、あの時に安部内閣で菅官房長官が凄く力を尽くして、この万博をやるんだと。それで万博なんかやったら維新の手柄になるから大阪の自民党、また駄目になるじゃないかっていう誰が見ても判る話ですけども、それでも進めていった訳ですよ。それで勝ち取ってしまいました。まあ、案の定、維新の会が、これで息を吹き返して、そのあとの衆議院選挙等では維新の会が圧勝を続ける一つのきっかけになった訳ですねえ」

水島「そうですね」

あんどー「やっぱり今回の大阪万博とIRってというのは、ある意味、日本の劣化を象徴している凄く解り易いことだなあとと思います。ひとつは、こんな無計画な夢洲みたいな、それこ

そ、ずぶずぶの所に建物を建てて、専門家は、これを止めなかったのかって思うんですけど、これが今で言うところの政治主導ですよ」

水島「そうですね」

あんど「俺が決めたんだからやるんだよ」

水島「うん」

あんど「出来ない理由を述べるなあつか言って進めてしまうと。出来ない理由を言っているんだけど、何とかしろおつか言って、政治主導だあつか言って訳の分からないことを進めてしまうと。政治主導がいかにかデタラメかかっているのが、ここで証明されていると思いますし、それと、もう一つが、やっぱり、このカジノですよ」

水島「うん」

あんど「カジノで金儲けしようっていうね、ヤクザですかみたいな話を堂々と国の中枢が進めていく訳ですよ。日本の経済の成長にはカジノをやらなきゃ駄目だとかね。どう考えても頭がおかしいでしょうという話ですけども、これが進められてしまう訳ですよ」

水島「そうですね」

あんど「だから、結局、誰の為にやっているんだと」

水島「はい」

あんど「先程、桜田先生もおっしゃいましたけれども、一つは政治的な思惑。もう一つは利権ですよ。もう解り易い」

水島「うん」

あんど「この為に動いて行って、みんなが、それに賛成してしまうと。踊らされているのかどうか判らないですけども、みんなが賛成して、そうだ、そうだということで進めてしまう。じゃあ、そのツケは誰が払うのかかっている話ですが、まあ、さっき社長もおっしゃいましたけれども、結局、費用は物凄く掛かっていると。じゃあ、この費用は誰が払うんですかかっている話ですよ」

水島「うん」

あんど「まあ、全部、国がもつていうことであれば国民負担は無い。もしかしたら経済効果だけあるっていう姿が作れるかもしれないですけども、そうはいかないで結局、大阪府民・市民がある程度のツケを払い、或いは大阪の財界、関西の財界がある程度のツケを払うっていうことになって来ると思うので、僕も、今からでもやめた方がいいと思いますし、カジノなんかは今からでも違約金を払ってでもやめた方がいいと思います」

水島「うん」

あんど「これは終わったあとに、じゃあ、誰がケツを拭くのかかっているのは本当に揉めるでしょうね」

水島「そうですね」

あんど「はい」

水島「はい。今、丁度、その維新の象徴というか、やっぱり大阪万博、正に、いかがわしいし、怪しいし、胡散臭い。こういう中で、やっぱり維新が、ちょっと落ちていますよね」

一同「うん」

水島「それと同時に、もう一つ、ご指摘のあった菅さんというのは、実は、我々も、ずっと言っているんですけど、維新のスポンサーというかプロデューサーは菅義偉だったっていうね。こういう内容、その菅義偉の後ろには、所謂、アメリカの巨大な国際金融資本とか色々なカジノもやる連中とか、こういうものが控えている。だから、中々やめられない理由ね。マフィア、怖いぞっていうね（笑）。というようなことと、和歌山県が一応、IRをやるって言っていたのにやめたんですね。

でも、やめたのは和歌山県の県議会が健全だったっていうんじゃないで、大阪と合同してね、二つ並びでやったら両方共、成り立たないから二階さんが譲ったってというのが本当だろうと。でも、それに関わっていた県知事と交渉していたのが、サンシティ・グループという完全な中国マフィアですよ。香港、マカオを中心に逮捕者も出て、アメリカや色々な所で入国禁止になったりしている、そういうグループが堂々と日本に入っている。和歌山で交渉していた。

これが北海道のニセコとかで色々やっているんです。一泊200万円のホテルで何をやっているかって言うと、一応、カジノですね。私設カジノ。マネーロンダリングをやっているんじゃないかって言われているんですね。ニセコは昔、オーストラリアやオランダの人達が多かったんですけど、今は殆ど中国人。一食3千円のラーメンとか定食だと1万円っていう凄い状態になっている。

これもサンシティ・グループとか、こういう人達がやっている。これがIRをやろうとしている。MGMが一応、中心になっているって、今、言われていますけど、一緒に運営をやるのは、中国人のお客さんが多いからサンシティ・グループも入って来る。結局、大阪が国際犯罪汚染地帯、あの万博だけじゃなくて、こういうところまで行くんじゃないかと言われていことも、せつかく今、言ってくれたんでお話ししておかなきゃいけないと思います。ということで、現場で一番、よく知っていると思いますけど、出原さん、お願いします」

出原「はい。宜しく申し上げます。私は今、言って戴いたように2017年から前大阪維新の会、幹事長の今井豊の秘書をやっておりました。合わせて日本維新の会の副代表も今井豊がやっておりました」

水島「はいはい」

出原「その当時の事をお話しさせて戴きますと、ご存じのように維新の会は13年前に結党され、橋下さんが出て来られましたけども、元々はベイエリアの開発をやるっていう風なのがメインやったんですね」

水島「ああ」

出原「ですから、今は、ある意味、ある程度、既に達成されている訳ですね。そしてIR、カジノですね。で、これを誘致すると。そのあとに出て来たのが、ああ、そうかと。そのベイエリアを中心として関西圏を創れば、これは都構想っていうのをやれば面白いなど。上手い具合に京都、それから兵庫の中心になるということで、その都構想っていうのを入れている

って、まあ、これ、上山先生とか色んな知識を入れてやっている訳ですね。その中で進めていった。ご存じのように、僕は17年から秘書をやっていた当時、よく今井さんと一緒に中国に行きました」

水島「はい」

出原「その当時は旧満州の大連に行きまして、今井豊は日本で初めて名誉市民の称号を貰っていますし、次の日に新聞でも報道されています。中国系の方ですね。日本では、あまり出ていません。その後、青島の名誉市民も取りまして、何をしたかと言いますと、一带一路ですね。大連港と大阪の港を繋ぐと。これはベイエリアの開発にどうしても必要だと。まあ、カジノで中国の富裕層を引っ張って来ると」

水島「そうですね」

出原「はい。当時、貝塚の阪南港という港にも飛鳥Ⅱを入れられないかっていうことで、当時の李天然総領事、大使級の総領事も来られましたが、旋回する時に狭かったんですね」

水島「うん」

出原「やっぱり大浜港じゃないと無理だということだった訳ですね。結局、その中で、府議会の方で色んな質疑があるんですけども、この話は水面下でやっていたんですが、実は、今井豊と松井知事との間でやられたのが人工的に中華街を創るっていう話です」

水島「ああ～」

出原「これは2018年の区議会の議事録に残っております」

水島「うん。ああ」

出原「それに合わせて、我々は中国に行ったんですね」

水島「う～ん」

出原「ただ四川省のマフィアが捕まりまして、丁度、大学病院の裏の飛田新地の辺り。飛田新地は、橋下さんが顧問弁護士だった、皆さん、ご存じだと思います。そこの辺り1キロに渡って中華街を創るという…」

水島「ああ。ありましたねえ。はい」

出原「はい。あったんですね。それで捕まって一旦、止まったんですが、そのあとコロナで、まあ、今は立ち消えになっていますけども、ただ2022年12月には今井豊さんが退任されたあと、吉村さんが今の知事ですけども、一带一路を大阪港と、このコロナ発祥の地である武漢と結んでおります。これは事実として残っているので、まあ、これは遺残ですね。だから、そういったことがある訳ですけども、やはり一番、問題になるのはカジノのルールの中で、一番、大きなのは、やっぱり、2015年に行われた上海電力誘致ですね」

水島「うん」

出原「ご存じのように、これは元々、伸和工業と日光エナジーという合同会社が2014年に落札し…」

水島「これも日本の企業ですよ」

出原「そうです。日本の企業ですね。まあ、伸和工業は大阪市内にありますけども、ただ、これはご存じのように縛りをかけたのは、発電会社に限るという風なメガソーラーの業者だけだということだったんですが、実は、この二業者は、そういう実績がございません。しれっと入り、入札も不明瞭だったので、まあ、おかしかったんですけども知らない間に片側の方で上海電力が入ることになって、こういったステルス参入になったっていうところで、当時の市長は橋下さんですね」

水島「はい、橋下徹ですよ」

出原「橋下徹です。ご本人は最近、松井さんとテレビで対談した時に、いや、私は関係ないんだと。お金は一回も、もらっていないって言うんですけど、いや、このメガソーラー、最初に出来たのが先島メガソーラーで、そこから日本全国に広がっているんで、これは全く関係ないとは絶対に言えないです」

水島「絶対、言えないですよ（失笑）」

出原「はい。言えないです。この闇は非常に深いんですよ」

水島「ねえ」

出原「そういった流れの中で、このベイエリア、南港、そして夢洲と、色んな場所に中華街を創るという計画があって、ずうっと水面下で、また表でも繋がっていますので、これは、必然ですね」

水島「うん」

出原「ですから、何があってもカジノだけは必ずやると」

水島「やらなきゃいけない訳ですね」

出原「うん。正直、万博は成功しようとしまいが構わないんですよ。こんなこと、どっちでもいいんですよ。ただ、ちょっと万博協会から吉村さんに横槍が入って、国も困っているんだから、吉村さん、聞いてあげてよっていうことですけども、これは、もう絶対に桜田先生がおっしゃったように、どっちも中止すべきですけども、もう納得しないと思いますけどもね」

水島「そうですね」

出原「はい。このあと、また色々とお話しさせて戴きたいと思いますけど、取り急ぎ、こういことでご報告になります」

水島「いやいや、今、話を聞いていて、大体、流れもよくお解りになったと思うんですけどね。有難うございます。あとで、また詰めていきたいと思います。室伏さん、お願いします」

室伏「はい。今日は万博とカジノということですが、そもそも日本人ってIRっていうもの自体を非常に勘違いしているところがあるので、あとで、その話をしたいと思うんですけど、まず万博について申し上げておくと、万博自体は、登録万博と認定万博と二つありまして、今回のものは規模の大きい登録万博の方です」

水島「うん」

室伏「これは日本だと70年代の大阪万博と、それから2005年の愛知、あのう…」

水島「ありましたね」

室伏「愛・地球博ってありましたね」

水島「はい」

室伏「あれが登録万博にあると。それから途中に挟まっている、つくば万博と沖縄万博、まあ、海洋博ですね。これは認定万博ということで、結構、やって来ていますし、あと80年代以降、それに当たらない地方万博ですね」

水島「はい」

室伏「あれが流行ったということで、日本人って万博に対しては比較的、凄くいいイメージを持っているんですけど、ただ、その万博って、どう始まったんですかっていうことを考えると、やはり帝国主義の時代、国威の発揚とか、うちは、こんな植民地があって、こんな珍しいものがあるよとか、こんな技術を開発したよという、ある意味、俺の国は凄えんだということを見せる場だったと」

水島「うん」

室伏「要はドンパチやらずに、そこで、まあ、何て言うんですかね、俺、凄えだろうっていう、何て言うんですか、こう眼とばすじゃないですけどね、そういうことしてやるという場だったと。それが70年代ぐらいは戦後の復興を経て、日本も、これだけっていうような、しかもコンセプトをしっかりとしてということであれば、それは恐らく良かったんでしょうけど、今、万博をやる意味って何でしょうって言うと、別に、帝国主義の時代でもないし、国威を発揚するようなことも無いし、そもそも大阪で、そんなことをやる必要があるんですかっていうことを考えると、その辺が非常に曖昧というか、まあ、根拠が無いというか、そういう感じですよ。

発展途上国だったら、うちの国は、こんなに発展しましたっていうことを言うなら未だ解りますけど、日本も自らどんどん先進国から転げ落ちているところでもありますけれども、まあ、そういう状況の中で、だからこそ、今回の大阪万博というものが何をやりたいのかよく解らない」

水島「はい」

室伏「はっきり言ってコンセプトが曖昧だと」

水島「はい」

室伏「元々言い出しっぺって、あの堺屋太一さんだったじゃないですか」

水島「はい」

室伏「堺屋太一さんって正に70年の大阪万博を言い出してやった方ですから、恐らく昔の夢をもう一度で言い出されたと思うんですけど、いや、でも、その時と状況は違うでしょっていうことを恐らく解っていないし」

水島「うん」

室伏「今回、その万博の協会の事務局の幹部に僕の知っている人が居て、ちょっと名前は出せませんが、色々話を聞いていても、はっきり言って何をしたいのか、よく解らないし、例えば、日本は課題先進国だから、まあ、課題先進国も何も無いだろうと思うんですけど、ただ色々な課題を、みんなが持ち寄って解決策を考えようとか、そんなことを言ったんです。いや、ちょっと待ってくれと。ビジネスベースでやるんだったら、解決策を考えたって(笑) そんなもの誰も共有しないよと。とっととビジネス化してやるだろうという話なんですけど」

水島「うん」

室伏「何か、そういう曖昧だけじゃなくてお花畑的な発想で。大体、そんなもので持ち寄る訳が無いし、何故、日本が持ち寄らなければいけないんですかという話じゃないですか。だからね、要は運営主体自体も、それぐらいの、まあ知っている人間なので、あんまり糞味噌には言えないので言いませんけども、そういう形で走っているのだから結局、仮にやったとしても、何なんですか、これはと。何の為なんですかってということで、正直、もう、はっきり言っちゃいます。面白みのない、つまらないものにしかならないだろうと。ここに万博の概要という意味の資料があるんです。これは普通に協会のサイトから、ダウンロードできるものです」

水島「はい」

室伏「パソナグループ・パビリオンとか吉本興業パビリオンって何の関係があるんですか」

水島「そうですね」

室伏「意味が解らないじゃないですか。バンダイナムコもね、いや、単純にイベントでね、エンターテインメント、エンタイベントでございますだったら解りますけど、だったら、バンダイナムコと吉本興業は解りますよ。パソナ？何の為ですか」

水島「それは、もう竹中パビリオンですよ」

室伏「ですよ。昔みたいにサンヨーだとか三菱とかがやってね、そういう面白いのをやるのも、私も、つくば万博に行きましたから分かりますけど、そういうものでも何でもないので、やっぱり考えれば考える程、意味が解らない。訳が分からないと」

水島「そうですね」

室伏「うん。だから、はっきり言って、やる意味が無いと」

水島「うんうん」

室伏「だから、僕からすると、あれだけトラブっているんだったら今の内に、これ以上、恥をかかない内にやめてしまえという風に思うんですけど、ただ、ひとつ気になるのは、先程、費用負担云々の話がありましたけど、一応、維新が万博を進めているってということで、維新と結び付けられて、よく考えられることが多いんですけど、一義的には、これ、日本万博ですね」

水島「うん」

室伏「ですから責任をとらなきゃいけないのは日本国政府になる訳ですよ。つまり、維新からすると、いざとなったら責任を全部、日本政府にぶん投げて責任逃れをすることが出来る

という風な仕組みにもなってしまうと」

水島「はい」

室伏「ここは、皆さん、注意して戴きたいなという風に思うところであります。ちょっと、始めは万博の話をして、あとでカジノの話、ゆっくり話をさせて戴ければと思います」

水島「はい。これがテーマです。『いのち輝く未来社会のデザイン』。まず、こういう、つまり命を輝かせるって言うんですよ。大体、この『いのち』をどう見ているのかね。命って、哲学もあれば、宗教もあればね、だから、私から見ると、これが全く無いですね。そういう宗教も哲学も思想も何も無い『いのち輝く』って言えば何か良いことだ。それで未来が輝いているって、この間のパリ・オリンピックのアイロニカルに満ちた殆ど人類の閉会式と言えるような、とんでもない開会式の姿を見ればね、よっぽど向こうの方が思想や哲学があるんですね。もう平気で世界は駄目だということを図々しくやっていた。

でも、ここには、もう何年前でしょう、これ（苦笑）、『いのち輝く』というね。それでどうやったら命が輝くのかって説明してくれる人は一人も居ないんですよ。そうすると、これに出て来るのが、ちょっと一応、途中ですけどね、今、せっかく言ってくれたので、これですね、はい。先程、言いました『クリエイティブ・ドリブンによる事業企画』ね。うん、8つのテーマ。8つの内、二人が抜けちゃったんですけどね（苦笑）、もう消えちゃったんだけど、これがね、それぞれの分野の最前線で活躍するエキスパートをテーマに事業プロデューサーに起用し、個々の創造性と、いいですか、個々の創造性と相互連携による共創を組み合わせ、テーマ事業の企画、パビリオンや催事を推進する。皆さん、解りますか。

地球的課題の解決に於いてって、地球的課題の解決って、この創造委員会に聞いてみたいんですけど、どういう地球的な課題の解決なんだと。それに於いて創造力は極めて重要であり、創造力を生かすことの出来る社会の未来像を示すって。創造力を生かすことの出来る社会の未来像を示すって、これをどういうふうにするんだっていうのがねえ、具体的に、これが答だって言うんですけどね。

『このテーマ事業は想像力を主体とした事業構築手法（クリエイティブ・ドリブン）によって進めることとする』。私は物書きの端くれですけど、言っていることが解らないです。恐らく書いている奴も解らないでしょうけど、難しいことを言えばいいだろうっていう事で（笑）、ここに居る皆さんもお解りにならないと思いますよ（笑）」

桜田「裏話を一つしていくと、まあ、目的が解らないという話になるんですけど、この辺は、川端さんの方が専門かもしれないですけどね」

水島「はい。今、川端さんにも聞きますけどね」

桜田「大阪の産業構造というのを今、調べてみたら日本の平均値と殆ど変わらないですよ」

水島「うん」

桜田「つまり平たく言えば、殆ど特色の無い地域経済になっているんだけど、ところが一般的には、やっぱり、どうしようもない奴と言われた製薬会社が中心になっていて、その製薬会社が日本経済全体を引っ張っていける存在だっていう、どうも、そういう理解をしているみたいなんですよ」

水島「ああ、なるほどね」

桜田「それが医薬であるとか、それから小林製薬であるとか、そういう薬関係」

水島「はい」

桜田「それから山中さんのねえ、ああいうIPS細胞の話だとか…」

水島「ああ、そうですね」

桜田「グローバルなっていうのは、恐らく環境問題じゃなくて、やはりコロナっていうものを相当、意識したと思うんですけども」

水島「ああ、なるほどねえ」

桜田「そういう形で医療産業というところに、ずうっと焦点を移して、それで大阪の経済を活性化していくっていうイメージを演出したかったんでしょね」

水島「ああ、それは…」

室伏「それって正にそれなんですよね」

水島「大事な話だ」

室伏「始めは、そういうテーマでやるっていう風な話で、なんとなあ〜く、そのメディカルとか最先端医療とか、そういう話をしていたんで、そうそう思い出したんですけど…」

水島「そうかあ、それで『いのち輝く』かあ、うん」

室伏「フジテレビのネット番組でコメンテーターをやっていた時に、それを聞かれたので、そんなことをやるんだったら万博なんかやって一般の人が来ても意味が無いから、ビジネスベースのコンベンションにして…」

桜田「そうそう、そう」

室伏「日本一のエグジビションにして、その時に重要なのは直ぐ商談が成立した時に出来るようにする為に法律事務所の出先とか会計事務所の出先とかコンサル会社の出先とかを置いて、その中でやたらっていう話をしたんです」

水島「(笑)」

室伏「でも、そういう発想は全く無いんですよ」

水島「無いですね」

室伏「結局、さっき言ったみたいに、みんなで課題を持ち寄って解決を一緒に考えようとか、バカなことを言っている訳ですから(笑)」

水島「そういう発想そのものがね」

室伏「ええ」

水島「もう70年代とか、60年代って言うかねえ」

室伏「いや、70年代、60年代ですらないですね」

水島「ああ、そうか」

室伏「ええ。だから、その割に僕達はビジネスを考えているって言っている訳ですから、そんなビジネスをやっていたらねえ、その企業は駄目ですわと（笑）」

水島「うん。だから、医療の問題か」

桜田「はい、そうですね」

水島「なるほど。製薬会社とかね」

一同「うん」

室伏「最先端医療とかそういう話です。はい」

水島「うん。だから、これは、今回、あまり、この枠で言うとYouTubeにバンされますけど、ワクチンの関係とか色々な物もグローバルな世界と繋がっていると。こういうことも考えられます。はい。続いて聞いてみたいと思います。京都大学大学院の准教授、先程、助教と言いついて間違えました、すみません。川端さん、お願いします」

川端「あ、はい。聞こえますでしょうか」

水島「ああ、聞こえますよ、はい。」

川端「あ、すみません、オンラインで失礼します」

水島「はい」

川端「今、先生方のお話を伺っていて、まあ、感想が大体、同じなので、そんなに付け加えるべきことが無いって言えば無いんですが、一応、大阪で仕事していると、まず、万博に関して一番、思うのは、僕は何年か前に東京から大阪に戻って来たんですけど、何か万博を盛り上げようとか成功させようっていう気運自体が、そもそも、あまり関西では、あのう、まあ…」

水島「いや、そうなんですよ（笑）」

川端「最近、ちょっと宣伝とかが増えて来ているので、その万博の動きを目にする機会は増えているんですけども、そもそも言う程、あまり関心ないだろうっていう感じが凄く気になっています。例えば、あれは何年前でしたっけ、東京オリンピックの開会式が、物凄くショボかったというのが話題になって…」

水島「ありましたねえ」

川端「当時、確かその時期に丁度、チャンネル桜に出させて戴いた時も、水島社長を中心に、その話が話題になりましたけれども、オリンピックは未だね、スポーツの試合がメインなので、試合さえ盛り上がればいいし」

水島「そうなんですよ」

川端「あとオリンピックの場合は、テレビ放映権でのビジネスが中心なので、まあ、開会式

は、おまけみたいなものだと考えることも出来るんですけど、万博ってイベントの全体としては出し物自体がメイン・コンテンツなので、それを盛り上げようっていう気運が無いっていうのは拙いんじゃないかなあっていうのは、この3～4年、ずっと思っていました」

水島「そうですね」

川端「維新の会の松井さんとか吉村さんとか横山さんとかが万博に関して色々発信されていますけれども、それもですね、ちょっと印象論になってしまうんですが、大阪都構想の住民投票を2回ね、物凄い全身全霊をかけて住民投票を勝ちに行った熱意を全然、感じないんですよね」

水島「う～ん」

川端「万博関連の発言って、大体、外部から来た突込みに対して何か通り一遍の言い訳をしているだけっていう感じで、且つ、カジノに繋がっていくようなビジネス方面で、裏で色々やりたいことあるんでしょうけれども、全く一応、人類の注目が集まるイベントですけど、それを成功させようというような熱意は全く感じないですよね」

水島「全くそうですね」

川端「ええ。だから、もう、その辺からして万博をやる資格が無い」

水島「うん」

川端「メンツというか組織でやっているんだな、っていうのが一番、大きな感想なんです」

水島「はい」

川端「細かい具体的な話は他の先生の方が詳しいと思うんですけども、建設が遅れているとか遅れていないとか、あと海外のパビリオンが当初、名乗りを上げていたんだけども、未だ発注に至っていないと色々報道はされていますけれども、最初に水島社長がおっしゃったように、いまいち情報が掴めませんよねえ」

水島「はい」

室伏「あ、そうです」

水島「隠しています。はい」

川端「それで、まあ、こっちが不勉強っていうのはあるのかもしれないんですけども多分、プロジェクト管理全体が、プロジェクト管理、そもそも何か、あまり、しっかり出来ていないんじゃないんだろうかっていう気がするんですよね」

水島「おっしゃる通りですね」

川端「私の場合は、仕事の関係で付き合いがあるって言うと交通関係の人とかぐらいしか居ないんですけども、万博に至る交通輸送計画がある訳ですけども、それも報道ではね、シャトルバスの数が合わないとか色々言われていますけれども、何か具体的に、ここに問題があるとか何とかって言うよりも、交通計画全体を誰がいつまでに、どうやって纏めるのかというような何か、そのチームのビルドアップ自体が出来ていないっていうような状況だという風に、まあ、去年ぐらいの段階では聞いていたので、だから…」

水島「はい、おっしゃる通りですね」

川端「まあ、それにしても、何かねえ、ここが悪いって言うより、そもそも全体が纏まっていないですかっていうのが…」

水島「そうなんですね（苦笑）」

川端「僕、一番のね、今、先生方、他の方がおっしゃった通りと思いますけど、私も同じような感想を持ちます」

水島「はい」

川端「さっきコンセプトの話が何名かの先生がされていましたが、室伏さんがおっしゃった通り、昔風のテクノロジー自慢大会としての万博っていうのは、今、やる意味っていうのは、そんなに無いはずですよ」

水島「うん」

川端「昔は、見本市的に何処かの会場に一堂に介して、色んな専門家が集まって新しい技術とか、昔は、室伏さんがおっしゃったように帝国主義が成果を競い合うっていうね、そういう場面でもあったので、昔は、やる意味があったのかもしれないけど、今はそれをやる意味はないんですよ」

水島「はい」

川端「やる意味がないとすれば、それに代わる新しい意義っていうのを相当、頑張って考えないと考えつかないはずですよ」

水島「はい」

川端「1970年の大阪万博の時っていうのは、今回の万博も一応『いのち輝く未来社会のデザイン』の理念を表した文章はネットで読めますので、視聴者の方も気になったら、一応、見てみればいいと思うんですが、読んでみても、いまいち何がしたいのか解らないというより、要は、所謂、コンサル作文っていう感じになっていて、誰が書かれたのか分かりませんが、ある程度、大学の先生が関わって書かれたのかもしれませんが。何か凄く表面的な通り一遍のメッセージっていう感じで…、1970年の時のコンセプトは『人類の進歩とは』っていうテーマで、それ自体は今から振り返れば凡庸に聞こえると言えば聞こえるんですけど、あの時は、そのコンセプトの文章があるんですけど、それを纏める過程で京大の桑原武夫先生とか当時の一流の人文学者とか、まあ、経済観を含めて凄い…」

水島「そうですね」

川端「科学者が集まって死ぬほど議論して、今、大阪で万博をやる意味って何なのだと、ちゃんと理想的にとか価値観として議論をぶつけ合うっていう場面があったんですよ。で、まあ、そんなことをやった形跡って、今回の万博に関して全く無い訳で」

水島「はい」

川端「本当だったら昔以上に、それをやらないと駄目なはずですよ」

水島「ああ」

川端「本当は。例えば、考えたらね、多分、夢洲の埋め立て地でやるっていうのも、まあ、これも色々な人がおっしゃっている通り悪手だと思いますけども、その夢洲、ゴミの埋め立て地でやるしか無いのであれば、ある意味、何か文芸批評みたいなことって何か意義を考えて一種のアイロニーとして、さっき水島社長がフランスのオリンピックに関しておっしゃったような皮肉というかアイロニーとして埋め立て地でやる事の意味って、何か考えたら語り得るのかもしれないかと思うんですが、しかし、まあ、そんな話で盛り上がった形跡は一切なくて、万博の各種、色々な会場の委員の方々みると、だいたい関西を中心とした経済界の方ばかり、まあ、経済界の方が別に悪いって言う訳じゃないんですけど、経済とは違う文明論っていうか歴史論みたいな批評的な目線が無かったら、恐らく万博をする意味はないだろうという風に僕は思います。

これで最後にしますけども、最初に申し上げたように、万博の気運自体が全然無いとか、何処に向かっていくのかっていう纏まりが無いという問題はね、何故、こうなってしまったんだろうっていう風に考える時に、やっぱり維新の会は大阪に於いて、物凄い政治的対立をヒートアップさせることによって盛り上げてきた政党ですよ。

つまり、ある種の地域分断と言うか何て言うか、国民のって言うか社会の分断を煽ることによって、そこに悪い奴らが居るぞ、みたいな既得権がどうのこうのとかって言うようにして、分断とか対立を煽ることによって一種の勢いで出来た政党だった訳です、元々は。それって、やはり国民的イベントというか人類的イベントをやるのには根本的に何と言うか（失笑）マインドが反していると思うんですよ」

水島「うん。その通りですね」

川端「だから何処をどうひっくり返しても上手くいきそうもないなという感じですが、それで、また最後に言いますけれど、先月でしたか先々月かな、万博の全体のプロジェクト管理は、あの電通さんが受注されるっていうことで入札が6月ぐらいにありまして、まあ、それ、他に出来る会社が居ないとか色々あるんだろうと思うんですけども、維新の会というか、その万博の関係者の皆さんが本当にやる気があるんだったら、コンサル丸投げで何とかなるという風に思っていないことを願うんですけども、恐らくそんな感じでやられるんじゃないかなあと想像していますというのを今の時点での私の感想にします。以上です」

水島「そうですね、全く指摘通りだと思いますけども、皆さん、今、川端さんがおっしゃっていたような、まあ、先程、言いましたけど、『すごいぞ！大阪・関西万博』ね。テーマは『いのち輝く未来社会のデザイン』で、この『凄いが集まっている！』と、『会場が広くてすごい！』っていうの、これ凄いでしょ（苦笑）、このコピーが凄いですよ。

『夢の空飛ぶクルマがすごい！』って、これは駄目になったものですね。ここは夢が破れましたね。はい。それから、こっちの、はい。『「いのち」を真剣に考える8つのシグネチャーパビリオンがすごい！』と。何だか分かんないでしょ。いのちについて8人みんなが考えるから凄いて言っているんですよ。そんなの昔からやっているんじゃないのとかね。

それから参加国が『たくさんの国が集まってすごい！』『移動が楽しくなる！！？新しい駅がすごい！』新しい駅が凄いて言っているのね。それから『大阪の知恵や技術が集まってすごい！』って、この知恵の何が凄いか言ってくれないんですよ。その中で恐らく『よしもと芸人やタレントの力も結集！』してすごい。『おばけたちと一緒に未来へ化けよう！』『たくさんの会社がそれぞれの個性を生かしたパビリオンで未来社会を表現します』って、

これ、バンダイが、また何か未来の『ガンダムが示す』って言うんだけど、ガンダムって、相当前のあれからですからねえ。

『海の水を使った水上ショーもすごい！』って『ウォータープラザ水上ショー』って、これ、まあ、分かりませんがね。つまり、皆さん、これが凄い一覧ですよ。本当にすごいと思ってね、いやあ、ちょっと、っていうのは一つも無いでしょ（失笑）、ねえ、『移動が楽しくなる新しい駅がすごい！』って、ここまで言うかっていうね」

あんどろ「それ、中身が無いから」

水島「ないんですね」

あんどろ「無理くりで『すごい！』って付けているので」

水島「みんな、すごい、すごって、全然、すごくないっていうねえ」

あんどろ「中身が無いことが、よく解るといふ」

水島「だから、このことを、ずっとねえ、書いているんですけど、それと、ここに確かに『大阪ヘルスケアパビリオン』というね、『「ミライ」がすごい！』って言うんですけど。ミライの自分に出会えるって。ミライの自分に会えたら、私なんか何なの、あと10年したら、どうなっているか、そんなもの、見たかねえよと、もう死んでいるかもっていうね（苦笑）、こういうことです。これが『いのち輝く』っていうイメージだということ、ずうっとねえ、我々の仲間の稲垣さんが取材したり色々したりしてくれました。

先程、言っていた中華街のことも今、止まっていますけど、そういう取材からこの大阪万博の流れを、ずうっと見てきているんですけど、では、稲垣さん、お願いします」

稲垣「はい。宜しくお願いします。昨年3月から4月にかけての大阪府知事選に立候補をさせて戴いたんですけども、その出馬会見の際に記者からの質問で大阪万博をどう思うかということ聞かれて、その時は大した深い知識があった訳では無いんですけども、まあ、中止すべきであると。違約金を払ってでも中止すべきだという話をしたことが最初だったと思います。

その時は、これまでの維新政治の本質というか理解を基に、それはオリンピックを見たら、必ず解るように中抜き、利権の万博になると。それも外資が儲かる。或いは、特に中国万博になるだろうといった理解の下で、万博は中止すべきだということから始まりました。

それから色々な形で情報とかを意識して見る様になって、現場にも見に行ったりして、まあ、理解が深まる内に、ああ、もう、これは益々、とんでもないものだ、当初から意義が感じられなかったんですけども、いまだもって全く意義が感じられぬものだということ、まあ、この確信が深まる一方でしたので、今、日本はそんなことをやっている状況じゃないだろうと。そういったところから、今でも大阪万博は中止すべきであると。

そして、更に、これは、もう全てIRに向けて維新がこだわっている、その為の通過点として、或いは、公金を引き出す為の大阪万博だということも、はっきり見えてきましたので、まあ、これは何処までも大阪府民、市民、或いは、日本国民の為にならないと、今、確信をもって言えると思います。

それで調べてみたら、やっぱり万博推進協会のホームページとかにも出ていますけど、結局、

コンセプトっていうのは、やっぱりグローバリズムですね。二つの目的というのが書かれていて、2030年迄に一つはSDGsを実現させる為のプラットフォームにすると。大阪万博、これが一つ目です。

二つ目は、日本の国家戦略ソサエティ5.0、これは何なんだ（失笑）っていうことになりますけど、結局、スマートシティということです。それに対する布石ですね。だから、結局、グローバリズムですね。だからグローバリズムによって、今、日本国民は決して幸せどころか、いのち輝くどころか、いのちの灯が消えていっているというのが現状ですので、やはり、これは何としても、ここでくい止めなければいけないと。ただ現場でというか大阪の街角で訴えていて、つくづく思うのは大阪市民、府民でさえ、殆ど関心が無いということです。

それは推し広めていけば、日本全体はもっと関心が無いし、今日で、あと250日となっていますけど。万博が近づくとつれて、逆にどんどん関心が下がっているんですね。仲間が色々、大阪万博推進協会にも電凸して色々進捗状況とか聞いているんですけども、維新の会は相変わらず秘密主義で進捗状況は答えられないと。

ただ、はっきりと答えるのは入場券の払い戻しには応じられないということだけ、きっぱりと答えたと。そういうこともあります（苦笑）。また、各国の領事館とか大使館にも電凸して、進捗状況を聞いているんですけども、大体、各国の総領事館は宣伝に熱心であるはずなんですけども、何処も積極的ではないと」

水島「そうなんだよねえ」

稲垣「ええ」

水島「これ、ちょっと言っておかなきゃいけないんだけど、万国博だから出展する国は自分の国のアピールっていうのがあるはずだけど、殆ど今、指摘があったように無関心ですよ。積極的に日本語で喋ってくれる人とか居てもいいはずだけど、まあ、中国大使館がその日だけだったか分かりませんが聞いてみると、ちょっとお待ち下さいって言って、ずうっと引き回されたあと進捗状況を聞いた話ですけど、本当に途中でプツッと切れて、プープー、あとは何か録音が流れるだけみたいなね、その問題じゃなくて、ここに問い合わせさせてくれ、ここに問い合わせさせてくれて、一応、中国ですら、そういう状態だっていうことです。はい、続けて下さい、お願いします」

稲垣「はい、細かい話は、また、いずれ出来たらしますけども、そういった状況で進められている中で、維新の会っていうのは親米保守でありながら親中であると。先程、出原さんの話にもありましたけど、そういった政党であるということですね」

水島「はい」

稲垣「因みに昨年の統一地方選の最中に吉村知事は、大阪万博を責任もってできるのは、自分しかいないって豪語していましたけども、12月には日本の万博だからと（笑）、思いっきり100歩ぐらい後退しているような自信なさげな感じに変わっていました。それがその一言に非常に象徴的に表れていると思います。こんな無責任な万博は即刻中止すべきだと思います」

水島「はい。有難うございます。そういうことで、今からドローンの映像とか、現状、つい1週間から10日ぐらい前の映像ですから、最新のものになると思いますので、これをご覧下さい。それと、川端さん」

川端「はい」

水島「やっぱりね、今、電通の話が出ましたけど、つまり、あの程度の東京オリンピックの開会式程度の世界認識とか文化意識とか、人間理解とか、日本の伝統文化の全くの無理解とか、この連中が『いのち輝く未来』を語るという、あれが一番、真面だと思っている、あれに頼らざるを得ないと思っているって言ったら本当に悲惨だね、日本人って、やっぱり馬鹿じゃないのと、お前らの伝統や文化って一体、何だったのというね、戦後の日本人と戦前までの日本の文化を分けなきゃいけないぐらい、本当に馬鹿にし尽くされるんじゃないかっていうねえ、みんな薄々感づいているのは、そういう外国大使館とかの対応を見ると無関心というより、もう日本の現状、それから衰亡していく日本の現実を見て、あまり関わらない、まあ、付き合いはするけど関わらないっていうような状態、大阪府民もそうだし、日本国民もそうだっていう、その現状、まあ、工事は一応、進んでいるっていう形になっていますので、まず、稲垣さん達が撮ってくれたタワーの方からのもの、これは誰でも見られますから、時間のある方は行って戴きたいと思います。

まず、タワーの方から撮ったもので、手前の方が、さっき出原さんが言ってくれたメガソーラーとか上海電力がやっているソーラーパネルなんかが見えます。これを皆さんに観て戴きたいと思います。もう一つはドローンを使った映像です」

－VTR開始－

字幕 <令和6年7月30日さきしまコスモタワー展望台より撮影>

スタジオの音声

水島「海上から撮った、あ、はい。流れましたね。はい。あれがソーラーパネルですね。はい」

字幕 <上海電力咲洲メガソーラー>

水島「その向こうが、万博会場になります。はい」

字幕 <大阪・関西万博開催地 夢洲>

水島「はい。向こうに見えていますね、これが、はい」

字幕 <夢洲2区>

水島「これが夢洲ですけど、皆さん、ご存じのように、手前の方は水場にするっていうね。池と言うか何て言うのかな、はい」

桜田「あとで説明します」

水島「そうですね、はい。これが一応、リングと言うかね。はい。結構、望遠なんで、少し画像があれですけども」

桜田「集成材だから水に弱くて」

水島「はい」

桜田「接着剤が剥がれていくんですよね」

水島「(笑)」

字幕 <木製リング向こうの黒い建築物がメタンガス爆発が起きた夢洲1区>

水島「ちょっと一回、止められるかな。はい。あそこの向こうに見えるのが、メタンガスが爆発した所ですね」

桜田「夢洲1区。1区という…」

水島「いうみたいですね、はい。はい、どうぞ、流して下さい、はい。だから何やら、やっぱり見ると建てている事は判るんですけど、高い建物が殆ど無いですね」

字幕 <夢洲3区 IR予定地>

水島「太陽の塔とかね、ああいうものは勿論、無理なんでしょうけども、これがIR予定地で、今、これの工事をやっていると言いますけど」

桜田「土壌改良工事を今、ずっとやっていて」

水島「ね、やっているって言いますけど」

桜田「杭を打ってコンクリートを流し込んでいるんですね。はい」

水島「これを万博の間、やめてくれって言っているんですね」

字幕 <向こう側には維新の会が大好きなメガソーラーが広がっています。>

字幕 <咲洲からは夢咲トンネルを通過して夢洲に渡ります。>

桜田「手前は海の時空館で780億円かけて造った建物です」

水島「ええ〜っ、ああ、そうなんですか」

出原「海の中に造っているんで相当、技術があったみたいですけども」

桜田「この辺りがPCBが埋まっている所ですね」

水島「はい」

字幕 <トンネルを抜けると、そこは、もう夢洲万博会場予定地です。>

水島「まあ、これは夢洲の会場予定地に向かう道の一つですね」

桜田「右側には地下鉄の路線が出来上がっているんですね」

水島「はい」

出原「去年も大雨の時、もう水没して通れなかったんですね。このトンネルをね」

桜田「そうですね」

出原「はい」

水島「ああ。なるほどね」

桜田「はい」

字幕 <目の前に大催事場や日本館が姿を現します。>

桜田「ジョイントの部分がずれたら、どうするのかなと思う」

水島「いや、そうなんですよ」

桜田「うん」

水島「ねえ。それと、これ、今、260日、250日って言ったかな。このぐらいになると、未だこの状態ですからね、現実にね」

一同「ねえ」

水島「門の所になったら、ちょっと止めてくれるかな、これ。もう、あったかな」

桜田「もうちょっと、先。うん」

水島「やっぱり、取材は中に入れてくれないんですよね」

桜田「うん。そこ、ここ」

出原「何か首長連合会で入った時もカメラとかは絶対に持ち込めないみたいで、はい」

水島「そうなんですよ」

出原「はい」

水島「何か許されたのも…」

桜田「撮影したいのに…」

水島「ここか、ここが今、言った、ここですね、今、通り過ぎちゃったけど、門ですけど、今、おっしゃったように、カメラマンもアングルを決められてワンショットしか許されないとかねえ、ここは日本かっていうね」

字幕 <街宣車の上から撮影したIR予定地の地盤改良工事現場の様子。>

出原「記念写真、撮って終わりとか、そんな感じらしいです。はい」

桜田「僕、工事前に、ここに4、5回ぐらい入っているんです」

水島「ああ、そうなんですか。はい」

字幕

<大阪万博報道の陰に隠れて本命であるIRに向けての準備は着実に進められています。>

桜田「788億円、土壌改良工事費」

出原「最初、1円も使わないと言っていたんですけどね」

桜田「(苦笑)」

水島「今、映像が終わったら、是非、それを、もう一回、繰り返して(笑)お話しして下さい。いや、もうコメントをどんどん言って載いて構いませんから」

桜田「うんうん、うん」

水島「気が付いたことがあったら。はい。今、このぐらいの状態ですね、あの工事の車も、こういうぐらいで動いている。これ、日曜日じゃなくてウィークデーなんで」

字幕 <試みに地上8~9mの高さからIR予定地周辺を撮影してみました。>

水島「これはIR予定地ですね。今、杭打ちをやっているっていう」

桜田「何にも無いです。日除けが無くて、風除けも無いという…」

水島「ああ〜、そうですねえ」

桜田「そこを幼稚園児から始まって遠足にみんな連れて行くという、うん」

出原「そうですねえ、もう30分ぐらいかけて、駐車場から歩いてパビリオン迄」

—VTR終了—

桜田「うんうん」

出原「はい」

桜田「いやあ、大変やなあ」

出原「そうですねえ」

桜田「うん。池があったでしょう」

水島「はい」

桜田「あれ、水上ショーっていうのが出て来た時にね、一体、この人達は何を考えているんだろうと思ったんですね。と言うのは、いや、夢洲まで行くっていうのが生ごみと焼却灰と、それから高度な管理を要する産業廃棄物ですね」

水島「うん」

桜田「雨水が降ってきますとね、どうしても地中に沁み込んでしまいます」

水島「うん」

桜田「ところが、その水を何処に処理するのかと言うと、溜池があったと思うんですけども、あそこに持って行って、そこで次に夢洲3区の方に持って来るんですね」

水島「うん」

桜田「何故、そんなことをしているのかと言うと、要するに、水質の管理基準がペーハーの

調整だけです。だからダイオキシンがありいのPCBがありいのと言っている話で…」

水島「という話でね、はい」

桜田「33種類の有害物質があるんだけど、ただ、それについては基本的にはペーハーの管理だけで、あそこに溜まった池の水を、こちらに持って来て中和させるって。中和させて、あとは沈殿させて上澄みを吐き出すというね」

水島「ああ〜」

桜田「だから夢洲の土壤汚染状況は、要するに、夢洲の捌け口が一か所あるんですけども、そこから排出される水質を検査すると言うんだけど、主には水質汚濁防止法は窒素とリン酸の濃度だから、有害物質を、そこで多分、やっていない」

水島「ああ〜、それも凄いねえ」

桜田「おまけに堤防の方には、その水位を調整する機能が全くありませんから、だから雨水が溜まって来ると、その地中に溶け出した 汚染水ですね」

水島「はい」

桜田「汚染水が地上に上がって来るんですよ」

水島「ああ〜…」

桜田「それで、そういう形になっている所の水を汲み上げて噴水にするっていう話でしょ」

一同「(苦笑)」

水島「いやあ、ちょっと(苦笑)、笑っちゃうけど凄く恐ろしい話で(笑)」

桜田「うーん、だから一体全体、何を考えているんだという話で…」

水島「毒をまき散らす訳ですか」

桜田「ええ。ええええ、ええ」

水島「なるほど」

室伏「そもそも、だから、あれですよ、水に含まれている有害物質の濃度とか、そういうもの自体は、やっている間に、また濃くなったりとかする可能性もあるっていうことですね」

桜田「するし、それから薄めたら終いやっていう話なんです」

水島「ああ、そうねえ」

桜田「濃度基準だから」

水島「ああ」

桜田「うん。しかも、そこに対する法律の網が全部、漏れているところが沢山あるから、夢洲全体で言うと、10個の法律、十法の法律が、成立する」

水島「うん…」

桜田「公有水面埋立法から始まって、海洋汚染防止法、それから土壤汚染対策法、何、廃掃法とかいう、それからP C A弁とかダイオキシンの規制法律がありますから」

室伏「本当だったら土壤汚染対策法で対策しなきゃいけないはずですね」

桜田「いや、あれはね、土壤、土対法は触れなければいいんですよ」

室伏「でも、あそこで建物を造っていますからね」

桜田「うん、それは労働安全衛生法なんだ」

室伏「あ、いや、土壤安全対策、あれは対策をしなきゃいけないことになっていますからね」

桜田「工事をする時には従業員に対する有毒ガスが出ますから」

室伏「そっちはそっちであるんですけど土壤3対策法は結局、掘って出てきたらって、まあ、元々ある訳でしょ」

桜田「はい、それはあります。あります。掘っている」

室伏「それを掘っていますから、だから、その意味で言うと、土対法上、持っている、あそこは大阪府ですか、じゃあ」

桜田「そうです」

室伏「だから、府が対策義務者になるんですね。

桜田「そうです。それで面白い話があるんやけども、その一個の方には工事をしなきゃいけなくなって盛り土をするんだけども、その盛り土は動かしたら、あかんって言う訳で。今、申し上げたように土対法の規定があるから、Aの汚染地からBの汚染地に持って行く訳ですね。そうすると、そこから出すなっていうお達しが博覧会協会から来ている訳です」

水島「じゃあ今度はドローンで、もうちょっと鮮明な映像を観て戴きたいと思います。ではドローン映像の方を宜しくお願いします」

—映像開始—

水島「これは海上の船から飛ばしたものです。あれが象徴的な…」

桜田「市役所の前ですね、ミヤクミヤク君」

出原「これは、何か開会式の青い服を着ていた」

水島「はい」

出原「あの歌を歌っているオジサンに似ているような気がするんです（笑）」

一同「（笑）」

字幕 <夢洲>

出原「何か親しみがあって（笑）」

水島「まあ、これがですね、あのう…」

桜田「ここに駐車場があって」

水島「そうですね」

桜田「丁度、東から西の方へずう〜っとターンして行って、円周2キロの355億円の集成材で造った屋根が出て参りまして」

水島「そうですね」

出原「でも、また、今、跡地の活用の事を今、この秋から募集すると言っていますけども…」

水島「はい」

字幕 <舞洲>

出原「私が聞いた話では、維新さんが、まあ、自見大臣、所謂、国の方ですね」

水島「はい」

出原「もし良かったら、この跡地、I Rで使わせて貰えんかみたいなことも、しれっと言っているらしいんですよ」

水島「なるほどねえ」

出原「それ、どうなんやろうと思うて、それに合わせてダブスタで一応、公募で、この跡地を募集するということも言っているみたいで…」

桜田「もう何を考えているのか」

水島「う〜ん、何か考えるんだなあ。はい。まあ、大体、同じ日だったんだと思うんですけどね、そういう映像ですね」

桜田「はい」

水島「車の流れが、まあ、工事用の車両が中心だと思うんですけどもね」

桜田「はい」

水島「この道が色々使われるということで、45秒おきにシャトルバスを出すって言うんですけどね（失笑）、ほんとかいって、そんなこと、あり得るのかっていうね」

字幕 < I R 予定地 >

室伏「高速道路の予定地っていうか、まだ完成していない所を通すって言っているじゃないですか」

桜田「はい」

室伏「だから、それは真面に通せないから無理ですね」

水島「いや、おっしゃる通りだと思いますよ」

室伏「しかも、ここってね、今、ここ、入られたらトンネルじゃないですか。今のところ、トンネルしかないですよ。橋をかけるんですけど」

桜田「いやいや、今、3車線、2車線のところを3車線、使って、それを上手く区分交通させて通行させるという、そういう計画ですね」

室伏「じゃあ、橋は」

桜田「橋は1本だけです」

室伏「1本だけですよね。だから…」

水島「そうなんですよ」

室伏「正直、無理ですよ（苦笑）」

出原「ええ、そうです。もう普段でも凄い渋滞する場所ですから」

室伏「ですよ、はいはい。私も、こっち側から見ましたが、もうトンネルも、結局、物流センターがあるのでトラックがビュンビュン、ビュンビュン、通っていますから」

水島「はい」

室伏「それを、物流の、この、ここを止める訳にはいかないですから、っていうことは、あのトンネルは、まず、使えないということと同じですし、何かねえ、維新は、そういうの好きですから、所謂、白タクですね。ライドシェアをやるんですよ。ライドシェアをやった途端に、車、いっぱい来ますから渋滞して終わりですね。はい」

水島「そうだね」

室伏「しかも、あの人達は、ほらナビを頼りまくるから、場所が判らないし、結局、大阪の場合は、もう充分、考えられるのは、白タクやると、じゃあ、誰がやるんですかって言うと、中国人が出て来る訳ですよ」

出原「そうですね、はい」

室伏「そうすると、私、聞いたんですけど、DDってあるじゃないですか、中国系の」

桜田「はい」

室伏「あのう…」

水島「ちょっといいですか、映像を少し、皆さんに注目して戴きたいんですけど、あれが、

リングのですね」

桜田「はい」

水島「手前の、まあ、我々が問題にしたのは、大潮とか台風とか来た時、水はどうなるんだというね、この手前の方の所、これ、予定では水場になるそうなんですけどね」

桜田「水場にしないとね、これ、駄目なんですよ、うん」

水島「この、こういう、ちょっと…」

桜田「環境基準、満たせないんで」

ースタジオへ戻るー

水島「そうなんです。これね、一応、予定は、こんな図ですよ」

桜田「うん」

水島「リングの間、前に、ここに、ああ、こっちか、このところね」

桜田「そうです、そうです」

水島「こういう状態にするそうです。それで手前は、こういう状態っていうね」

桜田「うん。あれ、汚染水の処理場ですよ」

一同「(笑)」

あんどう「落ちたら終わりです(笑)」

水島「本当にね、これ、ちょっと、一回、はい、じゃあ、映像は、もう終わったのか、向こうは」

ーVTRに戻るー

水島「ああ、止まっていますね、はい。この所が、そういう状態になっていまして中の工事は今、こういう状態ですね。はい」

桜田「あれもね、建物もね、3階建て以上の建物、建てる場合は、深さ50メートルの杭を打ってというのが協会の仕様書に書かれているんですけども、この形跡が全く見られないので」

水島「いや、だから、結局、ごまかしてるのは、さっき言った浮き形式というね」

桜田「あれはねえ、2階までです」

出原「2階までです」

一同「ああ〜」

水島「じゃあ、これ、殆ど拙いですよね」

桜田「そうそう、そうそう」

水島「高い建物は無いけど、3階、4階は、ちゃんとありますもんね」

桜田「ええ、ええ。ええええ、ええ」

水島「う〜ん、だから、そういう意味でもねえ、みんな、何か誤魔化しているっていうかね」

桜田「うん、だから何かあった時には、その協会は、いや、責任を取りませんというものを、ちゃんと言っていたということだね」

水島「ああ、そうなんですか」

桜田「うん。先程の工事についても、それは施工主との関係だから協会には直接的な責任は無いとかね」

水島「なるほどね」

桜田「こういう言い方で逃げるんですよね」

水島「でもねえ、こういう業者も大変ですよ、いざとなったらねえ」

桜田「うん。だから引き受けたくないって言うので」

水島「うん、でしょうね」

桜田「うんうん」

水島「まあ、こういう状態で、今、おっしゃるような形でリングの中に造られているというね、あのう…」

桜田「ここをですね、工事をやっている人、お昼ご飯、食べに行くのに、そのコンビニまで30分かかるから…」

出原「いや、そうですねえ」

水島「何か1軒だけセブンイレブンがあって…」

桜田「はい、あるんです」

水島「そこで、みんな、弁当を買うとか何かしているという」

室伏「そういう意味では下水が無いじゃないですか、ここ」

桜田「ありません」

室伏「ですよ」

桜田「ありません」

室伏「もう間に合わないから簡易トイレだっていう訳でしょ（失笑）」

桜田「いや、上水はレストランが出来ないんですよ」

水島「ああ、そうか」

桜田「うん」

字幕 <咲洲>

水島「それで、水を、いや、だから…」

桜田「水が使えないから、下水がないから、レストランが出来ないんで」

水島「(失笑)」

桜田「結局、レンジでチンしか出来ないという」

一同「(苦笑)」

あんどう「だから、食べる物もトイレも持って行かなきゃいけない」

桜田「いや、トイレは多分、簡易トイレのようなものをいっぱい作るんでしょうね」

室伏「いや、だから、結局、来場者は、それだけ…」

水島「うん、でも、あれを何、1億円で公衆トイレ造るって言っていたけど、それも真面目なことが出来ていないっていうね」

室伏「その来場者数に見合ったトイレは出来ませんね」

桜田「まあ、出来ません」

水島「だからねえ、値段だけは高くて1億円で、どうやって造る」

桜田「もっと言っておくと、近隣の下水処理場の処理の能力が8万4千人です」

出原「そうですね。ええ」

桜田「15万人、来るっていうことは、どうなるのかってことについて…」

水島「そういうことでしょねえ」

あんどう「みんな、我慢して…(笑)」

桜田「いやあ、だから汲み取り…」

出原「夜の中に」

あんどう「だから持って行くしかないじゃないですか(笑)」

水島「自分で?(笑)」

字幕 <舞洲から夢洲へ>

桜田「バキュームカー、バキュームカー、今、もう殆ど無いから」

あんどう「ああ、そうですねえ」

桜田「バキュームカーの手配、できないとかね、そういう馬鹿げた…」

水島「っていうことは、垂れ流しみたいになるの…」

室伏「いやあ、だから、僕は今、ちょっと話があれですけど、水場があるじゃないですか。絶対に、あそこでする人間が出て来ると思います（苦笑）」

一同「(笑)」

出原「災害では、そうなるでしょうね」

室伏「と思いますよ」

水島「ちょっと、本当に笑い事じゃないけど、ほんとに凄いね（笑）」

桜田「さっき、災害の話が出て来たけど、60万食を確保するってこのだって、一体、何処でねえ、冷蔵庫も無ければ…」

水島「そうですねえ」

桜田「それとメタンガスはあるので火気厳禁ってということになると、電気系統、使えない。発電機、使えない」

水島「あのう、これねえ、聞いたら、毎回、ちゃんとガスの噴出量を測るって言うけど、日々、出るのを止めろよって（苦笑）」

桜田「いや、出るの、止められないです」

水島「ガスの量で、じゃあ、家電ガスと同じでね、メタンガスが出る時は中止するのかって言ったら、そうじゃないでしょ」

桜田「だって87本のガス抜き管があるんだけど、その平均値を出すだけでも、1日、かかっちゃうよ」

水島「そうなんです。はい」

桜田「濃い所と薄い所があるから、そんなの机の上の話で…」

水島「だから正に胡散臭いって言うかね、これ、殆ど詐欺に近いって言うかね」

あんどう「これで大喜利番組が出来ますよ（笑）」

水島「大喜利だよねえ。こんなことありますよ、あんなことありますよって言うねえ」

桜田「排出されるメタンガスの量ってこのは1400立米ですね」

水島「ああ」

桜田「ということは100平米は4LDKのマンションだから、その10階建てよりも、まだデカいっていう。有馬温泉の湯出量、全部、計算したら1296立米でしたから」

一同「ああ〜」

桜田「うん。だから、実は、どれだけ膨大なガスがここから出ているのかっていう…」

水島「うん。そうですねえ。それで、VTRを観終わってスタジオに戻ったら、そのね、毒水が噴水として噴射される可能性もあるとかね」

桜田「うん」

水島「いや、これ、意外と視聴者の皆さんはね、そういうこと知らないで」

桜田「でしょうねえ」

水島「なんとか、ちゃんとやるだろうみたいなね、それで、今もうトイレの話だって、そうですね。それからレストランの水は本当にきれいな水で、ちゃんと調理できるのかとかね。大体、レストランが作れるのかどうか。ということは弁当を持って行かなきゃいけないのかとかね」

桜田「食べる所、無いですよ」

水島「だからねえ（笑）」

—VTR終了—

水島「セブンイレブンで大量に…」

桜田「日よけが屋根しか無いから」

水島「ああ、そうか」

桜田「それで、あそこも通路になっているので、實際上、そこで弁当を食べるような、これ、ならないんで」

出原「2千人ぐらいしか入らないんですよ。聞いたらね、はい」

水島「はい」

出原「でも、大阪の子供は平均1日に1万2千人」

水島「はい」

出原「あのう…」

桜田「連れて行くっていう」

出原「遠足に行くんですね」

水島「はい」

出原「あとの1万人の子供達は、この暑い最中、何処で食べるんだろうという話になっていますね」

水島「はい」

桜田「元々、なんで遠足に連れて行くんですねっていう話ですけども、前売り券にして入場計画者が2千8百万人」

水島「うん」

桜田「それで前売り券が1千4百万枚。その内の700万枚は、財界で面倒を見ると。で、残りの700万枚は自治体プラスアルファで面倒見る」

水島「ああ〜」

桜田「そんなら自治体、大阪府の受けた100万枚は遠足で処理するという発想なんですかね」

水島「ああ。だからねえ、こういう問題は本当に具体的に挙げたいと思うんだけど、川端さん、一回、中途で出なきゃいけないんで、川端さん、あ、居ないかな」

川端「はいはい、はい」

水島「どうですか、今の映像と話をお聞きになって、一回、退席する前に一言だけ…」

川端「いや、やっぱり、まあ、まあ、私も観ていてね、先生方の話も聞いていて、ちょっと吹き出してしまう様な所がある訳じゃないですか」

一同「(笑)」

川端「ただ、本来は、ほんまは笑とったら駄目な話なんですよ」

水島「いや、そうなんですよ」

川端「ガスの問題だけでなく結構、大惨事が起きる可能性っていうのは色々恐らくあるんでしょうね」

水島「そうですね」

川端「まあ、簡単なところで言うと、それこそ熱中症とかって、どんなイベントでも問題になるし、交通機関が破綻した場合、どんな影響を与えるかって、その交通渋滞だけをとっても大規模なことが起きた場合、そこからの波及って、中々予想がつかなくなったりするので、だから恐らく今日、この番組をご覧になっている人とか、ある程度、関西に関心のある人は、大阪万博はヤバイんちゃうかヤバイんちゃうかっていう意識が一応、あるんですけど、全国の殆どの方は、さっき何方かがおっしゃったように、何とか誰かやっているんでしょっていう認識だと思うんですよ」

水島「うんうん、うん。そうですね」

川端「とっていたら、予想外の大惨事が起きるっていう、まあ何らかの人身が関わる事故

なのか、まあ、何か判らないですけど」

水島「はい」

川端「そういう風に想像しておいた方がいいなあっていうのが改めて今の映像なんか見ても、ですねえ（失笑）思います。今、又、笑っちゃいましたけど、これ、笑い事じゃないんですよ」

水島「いやあ、ほんと、そうですね」

川端「うん。こういうのって本当は、だから、これ、誰かがギリギリでね、もう土壇場で、俺が覚悟を持って纏めるぞと言って、その纏めると言うか色んな人を動かせるパワーのある、まあ、人とか組織があれば何とかなるのか、イベントって大概、そういうものですから何とかなるのかもたしれないですけど、ただ維新の会って、そういう集団なのかって言うと全く…」

水島「全くそうじゃないですもんねえ」

川端「とは思えないので、まあ、あと何日ですか270日？」

水島「250日ぐらいですか、はい」

川端「いよいよ拙いんじゃないかというのが改めて、今、強くなりました。私は一旦、退室させて戴きまして、また参加させて戴きます」

水島「そうですね」

川端「すみません」

水島「はい、宜しくお願いします。今、言った様にね、少なくとも完全な一般的なイベント会場とか、そういう所のインフラっていうのがあるじゃないですか。まず電気、本当に大丈夫なのか。それからガス。ガスっていうのは、あっちのガスじゃなくて、電気やガス、或いは、そういったようなインフラを支えるものの、そういうエネルギー、電気とか、これ、大丈夫かって。もう一つは今、必ず、これから世界中に起きたようにコンピュータ関連のね」

桜田「はい、はいはい」

水島「こういったもののハッカーとか、こういうのは攻撃を受けた時、本当にそういうもの、万全な体制であるのかと。これ、止められたら本当に全部、ストップしちゃう。そうすると、そこに居る人達が冷房も無いような、何も無い、まあ、暑い季節だけじゃないですけど、そういう意味で非常に孤立して戻れなくなる。

変な話だけど、命の危険さえも、そんな大規模なテロとか、そういうものが無くてもね、そういうことがあるっていうことで、具体的に言うと、皆さんに知識を聞いてみたいんですけど、まず交通インフラっていうのがね、これ、本当に大丈夫か、日本でって言うのは、どうなんですか、これ。どうぞ」

出原「ええ、先程、ちょっと出たので言いますと、まず子供達ですね」

水島「はい」

出原「大阪の子供達は、まず100万人の小中高校生が半ば強制的に連れて行かれると」

水島「はい」

出原「例えば断っている学校に対しては直接、府の教育委員会や万博関連の人から電話がかかって来て、何故、行かないんだというふうなことで催促されるらしいんですね」

水島「うん」

出原「この10月半ば迄に大体のパビリオンの場所は決まって、今は決まっていないですけど、その中学校が市町毎に割り当てられて何処のパビリオンってなるんですけども、先程も出ていましたけども、万博会場迄のアクセスはシャトルバスだけなんですね。これも、まあ、南港からピストンするんですけど、それも大体、随意で大体、業者は決まっていますと」

水島「う～ん」

出原「これは私が知っている所の地元の業者です」

水島「はい」

出原「はい。そこの業者が請け負うと。その中に於いて、そこまで行くのに、よくあったのは地下鉄が子供達の特別電車を用意すると言っていますが、これは朝のラッシュの時に、ビジネスマンやOLが乗る時に子供達が、どうやって乗って行くんだと」

水島「うん」

出原「これは大阪府内から全部、行く訳ですけど、まずもって子供達は難しいと思うんですね」

水島「そうですねえ」

出原「ですから教育委員会の方からも3団体からの中止の申し入れがあったり、学校の方からも、校長は、とにかく、やめて欲しい。貝塚の校長からも聞いています。もう現場としては、本当にやめて欲しいという声もあります」

水島「うんうん」

出原「だから、私も意見書も一緒に上げましたし、こういう子供達の危険性で、おっしゃったように全国から来る訳ですよ」

水島「うん、そうです」

出原「これ、世界から来る訳ですよ」

水島「はい」

出原「もう一つ言うと、先程、2800万人、半年ですよ」

水島「はい」

出原「でも横のUSJは過去最高、今年、去年の段階で1千230万人ですか」

水島「はい」

出原「これは過去最高です。これ1年ベースです」

水島「はい」

出原「でも、これは半年で2800×4ってなる時に、ほんまに来るのっていうところと、逆にそれだけ用意する上に於いて海外、国内の方を含めて、本当に安全に輸送できるのかっていうところですけども、先程のトンネルも去年1回、水没していますし、また、上の橋も実際問題、工事用車両が8月1日から開通しましたが、5か月前倒して橋脚が非常に危ないんじゃないかと言われている中で僕も開催まで本当に至るのかと、まず懸念もありますし」

水島「そこなんですねぇ、う～ん」

出原「これは本当に維新さん、まあ、すごい、どっちかと言うとマッチョ的な考えで、本当に男性至上主義のパワハラ、セクハラ問題が出ていますけども、あまりにも考え深くないと言うんですか…」

水島「何も考えていない気がするねぇ」

出原「勢いだけです。私が当時、おった時も、パビリオンのこととか、先程、言いましたように『いのち輝く未来社会のデザイン』って言いながら、僕が聞いている話では松井さんとか吉村さんとか今井さんが言うには、遠隔でそういう風な皆さん、健康寿命の延伸に繋がるような、そういった操作のある、まあ、非常に先進的なものを作るんやとか、言ったら20年ぐらい若返ることをやるんやとかね」

水島「うん」

出原「さっきの話、そういうイメージなんやという話を聞いていたんで、それを街頭演説で言っていたのを覚えているんですけども正直なところ、あまり深く考えておりません。ですから、今に、こういう非常に浅はかと言うか、今、どんどん、やればやる程、問題が出て来て、それには、ちょっと付け焼刃で、災害が起こった時は、船で外から助け出すんやとか、えっ、そんなん無理やろうっていう話ですけど、何処から船が来るねんとか、また爆発しませんと」

水島「はい」

出原「大丈夫ですうとか言いながら蓋をしていたら、海外の国から、えっ、そんなん聞いていないよみたいなことが起こって信用を無くして、逆にそれを中国の領事館とか大使館が何も答えてくれなかったとか、やっぱり、そういう信用問題に繋がっているんじゃないかなあと思います」

水島「はい。そうですね」

出原「まあ、吉村さん自体が既に、あまり前のめりじゃなく、この前、コロナで休んでいますけど、実際、体調不良であったりとかっていう話も聞いているんですけども、この維新自体が、しんどくなってきているなあっていうのは感じております」

水島「まあ、そうですね」

出原「はい」

水島「つまり、そんなイベントをやるだけの力量も考えも無いね」

桜田「無いんですね」

水島「考えも無いね」

出原「無い。無い状況」

水島「私もちょっと失礼な言い方だけど、政治ゴロの集まりじゃないかっていうね」

出原「はい」

水島「それぐらい悪口を言ったんだけど、本当に今、こういった問題で言うと海外の人達も、うちの番組を見ている海外の外国の人もね、行きたいって言っていたんだけどね、是非、来て下さいって言えないんだよね」

出原「言えないですね」

水島「それと本当に事故が起きた時、責任、問われますよね」

出原「問われます」

水島「日本人は、我々はかつての前の前の東京オリンピックを覚えているから、本当にきちり、時間も何もね、みんな、びっくりするぐらい律儀に色んな事をやって準備したんだけど、今回、このぐらい杜撰な計画で、多分、今、おっしゃったように、何とかかなると思っっているっていうね、誰かがやってくれるみたいだね」

出原「まあ、あんまり成功しなくてもいいっていうような感じでね」

水島「そこですよ」

出原「はい。そうなんです。だから、もう国の方に押し付けるのは解っているんで、まあ、自見大臣の側近から聞きますと、もう国も本当は、これは、もう維新にやられてしまうので、ちょっと本当は止めたいたいんだということを言うと、菅さんが駄目だと」

水島「なるほどねえ」

出原「閣僚会議では、もう、ちゃんとオッケー、前に進めなあかんということを言われるということで、中々さすがに自見さんとかも辛い立場であるっていうのを聞いています。はい」

水島「そうでしょうねえ」

出原「はい」

水島「つまり、この交通インフラに関しても、かなり危ないってことです」

出原「相当、危ないと思います。はい」

水島「それと、ちょっと、まあ、一応、ざっとね、最低限の事だからね、やっておきたいんですけど、あと、さっき言った、所謂、ガスとか安全の問題ですね。人命の保護というか、勿論、台風が来たりとか大風が吹いたりとかね、色々、地震が来たりとか、そういうのは勿論、ある可能性があるんだけど、普通にやって、あそこで何かがあった時、逃れるとかいう色んな問題、さっき言ったガスの問題とか、これは、どうなんですか」

桜田「それで言うとねえ」

水島「はい」

桜田「落雷の心配があるんですね」

水島「落雷ね」

桜田「うん。それ、夕立が来た雷が鳴っているといった時に、その大屋根の上の方の手すりが、丁度、避雷針の代わりになっちゃうんでね」

水島「ああああ…」

桜田「それで、それが地中にアースをするという形になっているんだけど、まあ専門家の人達に言わせれば、そういう高圧の電流が流れる傍に人がおれば、そのねえ、それが特に、雨なんか降っている訳ですからね」

水島「はい」

桜田「そういうものを通じて伝わる可能性もあるし、それから地中に溜まっていた、つまりメタンガスっていうのは、ずっと発熱するんです。それを今、蓋をするという形でしている訳ですけども、そこに、もし雷の電流が流れたら、っていうことを考えると、本当に…」

水島「爆発する可能性もある」

桜田「うん。やっぱり非常に恐ろしいですね。メタンガスは静電気で爆発しますからね」

水島「う～ん」

桜田「うん」

水島「この間、子供達が行く休憩所の予定の場所で、簡単に爆発が起きた訳でしょ」

桜田「ええ、ええええ、ええ。だから、その説明も、要するに生ごみが腐敗したんだからっていう説明になってしまって、おいおい、ちょっと待ってくれと」

水島「うん」

桜田「大阪の夢洲の問題っていうのは、実は上の問題じゃなくて下の問題なんですね」

水島「はい」

桜田「夢洲、大阪湾の海底から言えば、泥の層が千メートルから三千メートル溜まっている訳で」

水島「うん」

桜田「それが全部、メタンガスの発生源になる訳です」

水島「うん…」

桜田「その上に浚渫土砂だとか建設残土を入れているんだけど…」

水島「うんうん」

桜田「大阪平野の建設残土っていうのは、みんな、有機物の塊だから、それ自身が、また、メタンガスの発生源に…」

水島「それ、すみません、大阪の、もう一回、言ってくれますか、そこ」

桜田「大阪平野の土っていうのは基本的に有機物の塊なんで…」

水島「あ、有機物、ああ」

桜田「ええ。つまり泥がずうっと堆積して行って出来上がったのが今の大阪の地形だと」

水島「大阪の、はい」

桜田「そうすると夢洲全体が1億トンなり、一つは1千万トンの焼却場があって、こちらの方には1億トンの建設残土と浚渫土砂があるんだけど、全部、発生源になってしまうんやね」

水島「おお」

桜田「そこに蓋をしているっていうような状況になるんで、そこにアースの避雷針の電極があるという構造なんです」

水島「いや、そうか、それでね、稲垣さんの仲間が電話して避雷針はどうなるんですかと」

桜田「ええ。ええええ、ええ」

水島「雷は大丈夫ですかって言ったら、やっぱり曖昧なんですよ」

桜田「そうですよ」

水島「いや、大丈夫なようにやりますってね。でも今の状態ですよ」

桜田「そうです」

水島「だから、基本的なところで、そういうベースがそうになっている訳ですよ。危険なメタンガスの発生のね」

桜田「何故、そうなるかって言うと、やっぱり、その縦割りの行政だから…」

水島「はい」

桜田「横串をさせるような情報源が無いと」

水島「ああ、ああ…」

桜田「人も、謂わば、寄せ集めだから、専門的な知識や知見のところも付け焼き刃やと」

水島「なるほど」

桜田「川端さんもおっしゃったけども、その全体のトータルで面倒を見るような人が居ないというような中で、しかもベース自身が色々な法律が錯綜しているようなところだから言い訳しようと思ったら、いくらでも言い訳できちゃう」

水島「なるほどね」

桜田「うん。そういうところでやっているという危機意識が残念ながら無いというのが…」

水島「うん、そうですよ」

桜田「やっている人達にとっても、その責任の取りようが無いという、そんな形になってしまっているんで、やっぱり非常に怖いですね」

水島「いや、だから、よく原発の事でね、2万年前の活断層があるとかね」

桜田「そう。ええええ、ええ」

水島「だから危ない危ないって言っている、でもよっぽど、こっちの確率の方がね」

桜田「そうです、高いです」

水島「千倍も二千倍もねえ、何万倍も高いかも分からないですよねえ」

桜田「だから能登の地震で注目されたのが、海底断層ですけども」

水島「はい」

桜田「実は大阪湾の丁度、西宮の辺りから淡路島に沿って、その紀伊水道を抜けるラインでね、大阪湾断層っていうのがあるんですね」

水島「うん」

桜田「これは最近になって、特に注目されるようなことになってしまって、それが、もし仮に動いたら、多分、夢洲まで10分程度で津波が押し寄せて、それが何度も何度も繰り返し押し寄せるっていう形になるから、それに対して大阪府としては、大阪湾断層の存在を認めていないんですね。

兵庫県は断層があるっていうことを認めて、何らかの対策を打つ必要があるって言うんだけど、大阪の場合は、もう上町断層の直下型地震に対してもそうだし、大阪湾断層の存在についても、そうだけでも無いものとして扱っているんですね」

水島「なるほどね」

桜田「うん」

水島「あ、それで、あのねえ、稲垣さん」

稲垣「はい」

水島「この間、やった時も、ちょっと、そのね、周辺をやる岸壁土っていうのかな、それ、大丈夫なのかとか言ったら、南海トラフが起きて、津波が来ても淡路島で止まるから結構、大丈夫みたいな。確か2.5メートルって言っていましたね」

稲垣「そうでしたね、はい」

水島「想定が。2.5メートルの津波までは大丈夫って言っているんですけど、結構、怪しいですよ、これねえ。う～ん」

出原「想定外のことを考えて対策するのが政治課題だから、そういうことを言う自体がもう、本当におかしいです」

水島「ねえ。いや、だから、もう彼らの場合は、やっつけ仕事で半年ぐらいの間なら、そんなものは起こらないみたいな、そんな大雑把なね、あれ、持っている感じしますよね。うん、この今のインフラの問題、非常に危ないことを、ちょっと、あれと、もう一つ、さっき画を見ながら、ちょっと、おっしゃっていたんで、これも毒水噴水ですけどね」

桜田「はい（失笑）」

一同「（失笑）」

水島「それと水の問題。これ、飲み水や、或いは、そういう色んな池の水とか、色んな問題を含めて、どういう風になっているか、ちょっとお話し戴けますかね、はい」

出原「先程もおっしゃっていましたが希釈すると。希釈して基準を満たす、所謂、環境アセスの問題ですよ」

水島「はい」

出原「そういったレベルを満たすといったようなところは、よく使われる手法やと思うんですけども」

水島「はい」

出原「そもそも、やっぱりPCBであったり、六価クロムであるとか焼却灰であるとか、埋められているゴミの島であるところを、それを建設する、まあ、建物ですね。カジノや、また、こういうパビリオン、飲食の場所ですね。これ、無理ですよ、だから、やはり、自然というものの中で、先生がおっしゃったように出来て来た、この地層であったり、大阪湾、特種な地層の中で、まあ、沖積層って言われる泥の層の下に洪積層という硬い層が、硬いと言っても知っていますけども、中央部は柔らかいんですけども、下部の洪積層は硬いんですけども、そういった所に物を建てて、そういった万博イベントはちょっと考えられないです」

水島「う～ん」

出原「だから、もう、そういう風な問題が起きて来ると。だから、水俣病とか歴史的にも、日本では沢山、そういう公害がありますけども、そういう過去の遺残であるとか、そういうことを習って生かされていないじゃないかと」

水島「うん」

出原「まあ、劇薬がある訳ですから、そのウォーターワールドのものを、また再利用する訳ですから、これ、不可能ですし…」

水島「そうですよねえ」

出原「し尿処理だけであれば、所謂、そういうのは生物的なバクテリアとか、そういうので変えることは出来ますが、そういうものではなく、化学薬品物質ですから…」

水島「そうでしょうね、そういうPCBとか、はい」

出原「これは絶対、無理ですのね」

水島「そうするとね」

出原「はい」

水島「今、敢えて、皆さんに知って貰う為にウォーターフロントとかいう、先程、画で観た、この部分ですね。こういう部分も含め、ここの部分、結構、危ない海って言うか池になるという…」

出原「はい」

水島「さっき言っていたことですね」

出原「はい」

水島「これは、もう、どうしようもないでしょ。根本的にこの場所自体がそうだから変えられない問題ですよ」

出原「変えられないです。はい」

水島「う～ん、そうすると、本当に危ないじゃないですか」

出原「それは、もう危ないですね」

水島「危ないですねえ。何がウォーターフロントって、毒水のあれっていう。それから、もう一つ、ここに真ん中にある噴水がある訳ですよ。緑の森っていうんだけど、これねえ、これも何だか、実際、木を持って来るって言っている訳でしょ。森を創れるんですか」

桜田「噴水の水は何処から持って来るんですかっていう」

水島「え？」

桜田「噴水の水は何処から持って来るんですかっていう」

一同「(笑)」

水島「だから、そういうことですよ、だから(苦笑)、ちょっと冗談みたいなね、う～ん」

桜田「うん。だから、ほんまに何て言うか、知らないことが言い訳になってしまっているっていう」

水島「うん、そうですねえ」

桜田「知りませんでしたっていうので言い訳しようという…」

水島「おお～」

桜田「だから物凄い、もっともって言って、万博については、水島社長達には関心を持って欲しいんですけどね」

水島「そうですねえ」

桜田「うん」

水島「いや、命に関わる問題でね(失笑)、いや、笑い声で言っちゃいけないんだけど、ここまで酷いかっていうねえ、さっき言った様に呆れるぐらいでね。そうすると、また具体的な話になるんだけど、そういう危ない水のベースの中で、この池もそうなる訳ですね」

桜田「うん」

水島「もう一つ言うと、水道っていうのは何処から持って来るんですか」

桜田「無いですね」

出原「無い」

水島「ね」

桜田「水道が、上水道管、だから、多分、給水塔みたいなやつを造って、給水タンクを造って、そこから、みんなに分けるといいう形になるのと…」

水島「ああ」

桜田「それから下水管も地中、埋められませんから地表に下水管を使って、その上に盛り土をするというような、そういう形での…」

水島「あ、そうか、掘るのは拙いから（苦笑）」

桜田「ええええ、ええ。掘れないんで」

水島「上にやって、ちょっと土を盛っちゃって…」

桜田「そうです。だから、それについては当然、その整いはするんだけど、夢洲の中に、謂わば、肥溜めになるんですけれども、下水を溜めて置く場所を造ると」

水島「半年経ったら膨大な量になりますよね」

桜田「ええ。いや、だから、それも毎日、毎日、そこから此花の下水処理場まで運搬するんでしょうねえ」

水島「運搬ですか」

桜田「うん」

水島「管じゃなくてね」

桜田「圧力の問題があったりとかするから」

水島「ああ」

桜田「これは下水道局の局長が言っていたんだけど、費用対効果がきちんと明確でないとやらないって言ってね」

水島「うん。そりゃあそうでしょうねえ」

桜田「だから、その半年間のイベントの為に膨大な下水設備を建設するというのは、やれないって言うんですね」

水島「ああ。それで何か色んな外のインフラ整備をすると11兆ぐらいかかるっていうねえ」

桜田「そう」

水島「とんでもないですよ」

桜田「もっとも、それは2800万人という過大な計画があったから、その過大な計画に対して、言わば便乗的に予算をつけていったという、まあ、一言で言ったらセコイというかね」

水島「そうですねえ」

桜田「うん。やるべきではないことを、やっぱり、やっているんですねえ」

水島「本当にやっているんですね」

桜田「うん」

水島「いや、逆に具体的なことを言って戴くと、本当にね、まあ、いいじゃないか、まあ、やらしてやれみたいになっているけど、それこそ、いのち輝くどころじゃない、命を無くす万博になっちゃうとねえ」

桜田「もっと恐ろしいのは、誰も責任を取りようが無いという」

水島「ああ～そうですねえ」

桜田「責任者、出て来いと言った時に、誰も出て来ようが無い」

水島「うん」

桜田「法律は守っておりましたあつていうような言い訳になって」

水島「うん」

桜田「結局、うやむやな形でしかつていう話です」

水島「そうですねえ」

桜田「最終的には、なんで、こんなところでやったんやあつていう話になって、いや、それは松井さんがやれと言うたからつていう…」

水島「うん…」

桜田「こうなっちゃうんですねえ」

出原「それで、今、松井さんは早々と辞めたんですね」

桜田「う～ん、うん」

出原「吉村さんが責任を取らされるので…」

水島「まあ、そうだ」

出原「もう早く自分、どっかで、まあ、今、言われているのは万博が終わったら、丁度いいタイミングを狙おうかと。そこで…」

水島「だからIRだけは、もう一回、橋下やらみんな、再登場しようっていうね」

出原「はい」

水島「そういうことでしょうかねえ」

桜田「夢洲は万博の候補地に挙がってなかったんですよ」

出原「挙がってなかったですね」

水島「ああああ」

桜田「それで挙がっていなかったのが、その知事のたつての思いということで」

出原「はい」

水島「う～ん」

桜田「ということで、候補地に決まってしまうと、だから、あとは一瀉千里で工事が進められるっていう関係でやっているから…」

出原「はい」

桜田「だから、やっぱり言われた官僚っていうか、うん、みんな、大変なんやねえ。もう頭、抱えていると思いますよね」

水島「おおお～。どうですか、あんどうさん、今、聞いて（苦笑）」

あんどう「まあ、これが維新の言う政治主導でしょうかねえ」

水島「そうなんですよ。これ、本当にね。だから、いかに、こういう馬鹿な政治家がね、大言壮語してやると、こういう風になっちゃうと人の命まで関わってきますよね。これねえ、う～ん」

あんどう「だから政治主導、政治主導がいいって言うけれど、政治主導って、こんなことになるんですよっていう非常に解り易い事例ですね」

水島「そうですねえ。もう一つ、さっき言った下水の問題もね、そういう状態だということとはトイレの問題って、非常に問題になる可能性が充分、ありますよね」

出原「そうですね。結局、さっき言った松井さんの鶴の一声で決まってしまうと」

水島「はい」

出原「あそこのゴミ捨て場の所に、また、お金を130億ぐらいかけて土で埋めると」

水島「うん」

出原「それで、そこを埋めてしまってから、結局、メタンが出るけども、その下水とか引くことを考えてなかったんで、今から、もう出来ない訳ですよ。結局、そういったことで、夜中に汲み取りをするというような形で、8万人分しか、所謂、下水は引けない訳ですけども、それと同時に、今、既に8千4百億ぐらい、もう国のお金も突っ込んでいる訳ですよ」

水島「はい」

出原「これ、万博関連で」

水島「はいはい」

出原「残りが9兆円ぐらいあるってことですけど、まあ、それを松井さん、吉村さんは、狙って国のお金を引っ張って来る為に万博をやろうというところで…」

水島「なるほどねえ」

出原「でも本当はカジノをやりたかったので…」

水島「そっちですよ」

出原「まあ、カジノに対する思いが強すぎて、万博は、もう、どちらでもいいんやっていうところになりますので『いのち輝く』どころか、いのちを見捨てる万博になってしまったというような方向性」

水島「まあ、そうですね」

出原「僕は、この前、I Rの説明会、大阪市が来ているのに行ったんですね」

水島「はい」

出原「そして色々災害対策はどうやっていくかと聞いた時、一つビックリしたのが、じゃあ、何か災害が起こった時、これ、陸の孤島やねと」

水島「はい」

出原「その時に非常用電源はどうなりますかって聞いたんですね」

水島「うん」

出原「これ、I Rですよ」

水島「はい」

出原「そうしたらI R推進局は、3日間、非常電源がちゃんと出来ておりますと」

水島「え、えっ、3日間？」

出原「えっ、3日間だけ非常用電源は用意していますって言うんですね」

水島「ああ、補充電力でやれると」

出原「補充電力は」

水島「ああ」

出原「じゃあ、これ、3日間って、ただ内閣府では基本、公共施設に関しては、1週間っていうガイドラインがあるんですよ。それでは、例えば電柱とかが倒れて戻すのに1週間、かかるのに災害対策が出来ないじゃないのかと」

水島「うん」

出原「これ、おかしいんじゃないのって突っ込んだら、いや、まあまあ、まあって言うから、じゃあ、100歩、下がって非常用電源は何を使うんですかと聞きましたら判らないって言うんですよ。はい」

一同「(苦笑)」

出原「いや、ガスを使うのか電気ね」

水島「うん。ありますよね」

出原「例えば、ガスや電気を使うのか、それとも重油を使うのか、港湾であれば重油がね、船の電力、電源というか…」

水島「小さい火力発電みたいな形で」

出原「使えますよね。でも判らないっていうんですね」

水島「ああ～…」

出原「それで、よく貴方達、来ましたねと。ちょっと名刺下さいと。渡せませんっていうんですよ。いやいや、自分達の上司の横山さん。私も今井さんの秘書をやって、弟子なんで、横山さんも今井さんのあと幹事長になられてお弟子さんやから、言っておいて下さいと。こんな杜撰なことをやってね、カジノへとか国際会議場とか、よく言ったねと」

水島「いや、本当にそうですよ」

出原「僕ね、万博は、もう、緩いんで、杜撰なのは判っていたんですよ。まあ、秋頃に災害対策をやりましていうことでね、防災計画するって聞いていたけども、今年の1月、I Rの話聞いた時に、ああ、そんなことをやっているんですかと、私、言いました」

水島「う～ん」

出原「はい」

水島「いや…」

出原「そんな状況です。はい」

水島「いや、ラスベガスとかね、I Rのあれもあるけども、本当に、陸の孤島に、水道、電気、ガスね」

出原「はい」

水島「これ、全部含めて、殆ど不完全ですよ」

出原「はい」

水島「今、言った様に」

出原「はい」

水島「何かあったら、その3日間しかやらない」

出原「はい」

水島「それと、やっぱり今の交通インフラの問題もあるし、まだ、全然、出来ていないですよ」

出原「全く出来てないと思います。はい」

水島「う～ん…これ、元お役人さんとしては、こういうことって、今迄も結構、あるの」

室伏「ちょっと、笑っちゃいけないですけど…」

水島「うん」

室伏「いや、万博の無計画はあれですけど I R の方もね、そこまで無計画だとは思わなかったですよ。

水島「今聞いたら、ビックリするよねえ」

室伏「大体、それだけの施設を創るんだったら、まず一番、初めに電気、ガス、水道、それから道路。この計画、立てますよね。私も、こっち側の方から見ましたが交通インフラの、その橋も無いから、あれだったら、橋をもう 1 本かけ、2 本かけて、トンネルを、もう一つぐらいやらなきゃ駄目だし、鉄道を地下鉄だけじゃなくて J R も延伸して 2 線。それぐらいやらないと人が移動できないよなど。

しかも工事中は工事車両が通るから、それを考えると仮設の工事用の橋もかけなきゃいけないよねっていう風に、僕は見た時、思ったんですけど、だから聞いていると、その計画も何も無いっていうか…」

水島「無いよね、うん」

室伏「あのう、何とかなるんちゃうみたいな」

水島「いやいや、そこなんだ、そういう感覚だよ。だから、それが胡散臭いっていうのは」

室伏「何とかありませんっていう風ですけど…」

水島「だから、そういうことですよ。だから非常に大事な話でね」

一同「うん」

水島「これだけの世界に対するイベントっていうかねえ。私も、今、言われて分かったんだけど、万博は、実は I R の為のインフラ整備の為にやると思ったら、どっちもやってないっていうねえ（苦笑）」

室伏「いや、私も、そう思っていました。だから、何かやっているんだらうなあと思ったら」

水島「いやいや、普通、思うからねえ」

室伏「あまり何もやってなくてですね」

水島「常識のある奴は、みんな、そう思うからねえ、そこまでもやっていなかったっていう、今の出原さんのお話を聞くと」

室伏「いや、その意味で言うと、あれですよ、その I R の予定地の方も杭打ちはするけども、土壌自体を改良しようとかっていう事はやっていないですよ」

出原「そうなんです」

室伏「だから向こうも、いつ、ぼお～んってなるか判らないってことですよね」

水島「まあ、そりゃそうですよ」

出原「だから心配しているのは、先程、このIRの工事を、一旦、万博の半年間、停めて下さいと。この話で、ひょっとしたら、このMGMさんとオリックスさんがね…」

水島「はい」

出原「段々ですねえ、この契約の解除の日数が延びて行っているんですよ、後に」

水島、「あっ、契約の解除が…」

出原「あと、契約の解除を」

桜田「だから26年3月でしたっけね」

出原「そう、そうなんですよ」

桜田「26年3月まで解除権っていう…」

水島「ああ、持っているんですか」

桜田「持っているんですね」

水島「ああ、MGMがね。それで焦っているんだ」

出原「あるんですね。これ、向こうが解除しても、こちらは全く何も言われれないということなんですけど…」

水島「ああ、文句をつけられないと」

出原「ここまでインフラにお金を突っ込んでいますね。ただ逃げるんちゃうかっていう話になってまして、竹中さんはオリックスの外国取締役でありまして」

水島「ああ、うんうん」

出原「まあ、だからこそ、ああいう風なパビリオンもあるんでしょうけど、パソナさんね」

水島「はい」

出原「まあ、それはいいんですけども、まあ多分、今ね、綱引きがあってMGMも凄く悩んでいるんですよ。っていう話は聞いてます」

水島「ああ～」

出原「だから最後は撤退するんちゃうかっていう風になっておりまして、そのとどめが、この半年の工期を止められた時には、俺ら撤退するっていう話は出ているっていう噂が、ちょっと流れていましてね」

水島「ああ～、それに関わっているんだ」

出原「ええ。そうそう、そうです、そうなんですよ」

水島「なるほどね」

出原「これ、結構、だから吉村さんは相当、精神的なプレッシャーがあるらしいです」

水島「それは神経がね」

出原「はい」

水島「ああ。そう、そこも大変、いやあ、色々な地上波でそういうの出ていないからねえ」

出原「はい」

水島「ああ、そうですか。26年に解除できるんですか」

出原「出来ますよ。はい」

水島「MGMの方はね」

出原「そうなんですよ」

水島「というようなことになったら、ゼロどころじゃなくて壮大なマイナスですよねえ」

出原「はい」

水島「いかに、いい加減かっていうのが…」

桜田「そう、それで…」

水島「ああ、どうぞ。はい」

桜田「港湾、夢洲の造成に一体、いくらのお金がかかっているのかっていうのは、実は判らないんでね」

水島「なるほどね」

桜田「港湾局自身は2700億円という金額を出してて、まあ、面積で、僕は按分計算すれば4000億円っていう数字になって、ここから、ある時から松井さんが6000億円とかね」

水島「はい」

桜田「1兆円かけて来たのにというようなことを言い出したんですね。でも、それは借金で、言わば造っている訳ですから、そうすると、その返済の目処が無いんですよね」

水島「無いでしょうねえ」

桜田「土壤汚染を、まず認めてしまっているから、そうすると土地の資産価値が多分、ほぼ十分の一ぐらいになるっていう」

水島「そうでしょうね、う～ん」

桜田「うん。そうなって来ると、益々、大阪の特別会計ですけど、公営事業会計という公営関係の事業は恐らく破綻するだろうという」

水島「いや、もう…」

桜田「ほぼ、それは、あのう…」

水島「ねえ」

桜田「うん」

水島「もう見えていますよね」

桜田「ええ」

水島「今のままだったら」

桜田「介護保険料がやたら高いとかね。日本で一番、高いんですかねえ」

水島「うん」

桜田「そういう市民への負担問題っていうのが、やっぱり政治問題になって来るというように思います」

水島「稲垣さん、稲垣さん」

稲垣「はい」

水島「今の、こういう話を聞くとねえ、我々も、ずっと反対運動をやって来たけども、ここまで凄いとは、ちょっとねえ、IRもね、いや、IR狙いだっていうのは、よく解っていたけどIR自体の計画も物凄く杜撰だっていうねえ」

出原「そうですね」

水島「うん。それで大阪の中国との関係で、あの港湾の契約とか、このまま行くと、どうなるんですかねえ」

出原「ですから、もうご存じのように、この万博は失敗しますよねと」

水島「う～ん」

出原「維新も、かなり弱体化されるんですけども…」

水島「ああ、それはするでしょうね」

出原「それまでに、このMGMが撤退すれば、もう、これは今迄の物凄いお金、巨額の投資をしている訳ですから…」

水島「う～ん」

出原「これは維新さんが責任を取ると。事業主は大阪府市であって国ではありませんのでね」

水島「はい」

出原「万博に関しては100歩下がっても、国も関わっておりますので…」

水島「はい」

出原「ですから、これは、やっぱり相当な責任になって来ますけど、今、撤退する可能性が、かなり上がってきましたし…」

水島「いや、そうですよ」

出原「はい。だから、もう維新の終わりの始まりだなあとと思います」

水島「稲垣さん、どう思いますか」

稲垣「ああ、はい。もう思っていた以上に、凄い杜撰さに開いた口が塞がらないレベルなんだなあっていうことが…」

水島「これねえ」

稲垣「まあ、ちょっとビックリしましたけど、I Rに関して、そうだっていうのを聞いて、本当に維新も終わりだなあと。最近、やっぱり維新に対する不祥事が、文春とか新潮とかも採り上げ始めているんで、いよいよ見放されている感じですよ」

水島「うん」

稲垣「ですから本当に今回のオリンピックの開会式や、よく向こうではヨーロッパの閉幕式だと言われ方もしているし、グローバリズムのキリスト教文明に対する勝利宣言みたいなところもあると思うんですけども、今回の大阪万博が本当に、あの日本の閉幕式というか、まあ、そういう風に印象付けられるような危惧さえ感じちゃいますね。やっぱり、だから、本当に大阪府民の皆さんとか、日本国民の皆さんに関心を持って戴いて、やっぱり、これを、世論というか国民世論によって、くい止めないといけないんじゃないかなあと、つくづく、思いますねえ」

水島「そうだよねえ」

稲垣「はい」

水島「いやあ、これね、今、これ、かなり本当に、私、I Rのことを聞いて、万博も深刻な、もう本当に深刻な話だけど、I Rまでやったら、もうねえ、MGMの放棄っていうことがあると、一体、使ったお金はどうなるんだっていうね。だから維新の連中がねえ、ごめんなさいじゃあ済まないからね。本当は、あの辺の松井、橋下はみんな、連帯保証人になって貰いたいっていうかねえ、そういう気はしますけども。これは結局、日本の政治の終焉ですよ」

多分、もう一つはMGMのあれは、今回の延期の問題とか工期の中断してくれっていう問題は、やっぱり理由になる可能性は非常にあります。それと、もう一つは、やっぱり、今言った様にイスラエルとか今、そういう状態で、イランの問題、これ、戦争とか、そういうものが始まる可能性がある。そうすると、もし、それが本格的になったとしたら石油の輸出入とかね、こういうものが95%以上、やっている訳だから、もう、それどころじゃないというね、もう工事も出来ないよっていう理由になっていくっていうね。戦争を理由にやめるなら、まだ、いいけどもね」

室伏「はい。それもありますけど、あと、もう一つあれですよねえ」

水島「うん」

室伏「イランもありますけど、レバノンのヒズボラに対する攻撃も始まったじゃないですか。

それで、今、何が起きているかって言うと、これも今朝のニュースですけど、僕は、まあ、日本のは知らないですよ。僕は日本のニュースを見ないですからあれですけど、言っていたのは、もうレバノンでアメリカとイギリス、それからフランスもそうかな、もう在留している自国民を帰国するようにという勧告を出して、レバノンの空港はもうトランク3つも4つも抱えたアメリカ人とかイギリス人で、もうごった返している状況ですね。アメリカとイギリスが、それを言ったってということは、かなり戦争が起きる…」

水島「はい、そういうことですよ」

室伏「つまり、今のイスラエル・ハマス戦争の戦線が拡大する可能性が高いということで、これは以前、討論番組で、藤さんがおっしゃっていましたが、イランが参戦して、戦争が始まったら油価が天井知らずになると。油の値段が」

出原「はい」

室伏「ということは、正に今、水島社長、ご指摘の通りの話もあるんですけど、一方、そうになったら、各国は、そんな万博なんて言っていられないんですよ」

水島「もう、そう」

室伏「だから、もう出展予定したところもやめますって」

出原「はい」

水島「そりゃそうですよ、国がね、うん」

室伏「逃げて行くと思いますから、要するにパビリオンって、相当、スカスカになりますよ」

出原「そうですねえ」

水島「だから、さっき、あのパリ・オリンピックで皮肉を言って、今日も何日も、4万人も、ああ、もうパレスチナだけでも10万人近く死傷者が出ている。ウクライナだって60万人も死んでね、何が平和とあれの祭典だっていうね、皮肉を開会式でやっていたと思うんだけど、正に万博のいい加減な、いのち輝くなんてね、何を言っているんだと。油も来なくなっただけでね、戦争が始まっているのに能天気なことを言っているんじゃないよということ、室伏さんがおっしゃったように、各国がもうやめますと。いい理由でね、こんなことをやっている状況じゃないからってということになる可能性が凄くありますよねえ」

あんどう「そうすると、維新が助かりますよね」

水島「助かることになる（笑）」

一同「（苦笑）」

水島「それを期待しているんじゃないかってね」

出原「そこは、そうですね。あのう…」

水島「戦争を理由にね」

出原「戦争を理由に」

水島「いや、もう、これはやりたかったけど、しょうがないなあみたいなあね。これは、もう、チューチュー取っちゃったから、もういいやとかね」

出原「そこが維新の浅いところで本来、良いタイミングで延期ってやれば良かったんですよ」

水島「そうなんですよ」

出原「延期すれば維新の株が、逆に大分、上がる訳ですよ」

あんど「そう」

出原「あがるんですよ。でも、これ、やらないじゃないですか。是が非でもやると馬場さんも、もう絶対にやると言い切っているじゃないですか。これが問題ですけども、普通、そういうふうな、まあ、普通、バランス感覚が良ければ、この能登半島地震も元旦に起こって、どう考えても、はい。でも全くインフラ整備に於いては上物をうちはやっている。それで能登半島は、そういう下の方の下水とか水道の問題が、全然、関係無いっておっしゃってしまったんで引くに引けなくなってしまっ…」

水島「いや、そうなんですよ」

出原「なので、ですよ」

水島「あの時、いい、きっかけだったんですよ」

出原「本当にそのタイミング、絶対」

水島「少なくとも延期って言えば、大阪がねえ、大阪人、心意気だっって言ってね」

出原「はい」

水島「維新の株、上がったかも分かんないですよ」

出原「本当にびっくりしたのは、内灘町の清水さんって方が意見書を出して、とにかく万博を止めてくれと。中止してくれってということで、石川県の方から、この町会議員さんが出したんですよ。そしたら、そこの中で維新の議員だけが一人、反対したと。その方は、何と被災者なんですよ」

一同「ああ〜…」

出原「被災者でありながら維新が上意下達なんで、もう絶対、あかんと、意見書に反対しろということで、これ、うちもそうでした」

水島「うん」

出原「貝塚も」

水島「なるほどね」

出原「維新だけは反対すると。もう、だから、もう徹底してしまっってね。何も考えてないんですよ」

水島「いや、そうですね」

出原「もう全く、はい」

水島「誰かがやってくれるって状態を、ずっとやってきて…」

出原「はい」

水島「だから行政とか、そういう能力がね、まあ、はっきり言うと、コロナの時、やっぱり、失礼ながら大阪はね、一時的に言えば、世界一、死亡率が高いっていうね」

出原「はい。おっしゃる通りです」

水島「それでねえ、行政改革だあ、規制ね、あれだって緩和だって言って…」

出原「はい」

水島「結局、そこですもんね」

出原「そうです」

水島「実績がそれだったですね。いざとなった時、何も出来ないっていうのが、よく解るっていうねえ」

出原「はい、そうですね」

水島「今回の場合、戦争が始まったら…」

出原「いや、本当にそうです」

水島「本当に喜んで飛びつくのかなあ、じゃあ、やっぱりやめますっていうのをねえ。これ、どうなるんですかね、ほんとね」

出原「いやあ、そこらへんが、ですから、馬場さんも、そこまでの国家観を持ってやってはならないし…」

水島「まあ、全然、無いからね」

出原「吉村さんも、そこまで、とにかく貰っちゃっているんで、もう無理ですよ。掴まされているんで、はい」

水島「いや、IRの問題もね」

出原「はい」

水島「そうすると、今回のトラブルが起きているのは、さっき言った音声の問題とかね」

出原「はい」

水島「そういう問題じゃないのと、もう一つは、実は、さっき、ご指摘になった製薬会社の問題。これね、イランのパレスチナ戦争っていうのも、世界戦争的な形に広がる危険の可能性があると、もう一つは、この秋から始まる、このYouTubeでやると直ぐバンされるんで言えないんだけどもね、我々の国自体に、また、これが蔓延するということがある。

それで、その製薬会社、まあ、小林製薬っていうのが槍玉に上がって、国産の会社がやられて、つまりグローバリズム、所謂、ビル・ゲイツ財団系のね、そういう人達に反抗的な者は

潰す。世界の製薬会社っていうかねえ、医療業界も含めて、こういう人達が万博も含めて、そこに影響を与える可能性も凄くあるなあというねえ。

だから、正に世界の今のヤバイところを、維新が、まあ、岸田内閣もそうだけでも、本当に、こういうものを引き受けちゃっているっていうねえ、危ないですねえ。これは、今日、指摘があったから、ああ、なるほど、この中にある『いのち輝く』の中に、未来の医療の問題とか公衆衛生の問題…」

水島「大阪ヘルスケア、えー…」

出原「パビリオン。はい」

水島「パビリオンっていうね。こういうのも、ある種のそういう業界との繋がりがあったということも含めて恐ろしい社会だねえっていう感じがしてくるんですけども。具体的に言うと、これ、そのまま行くと、予想として、どうですか、こんな状態でね、戦争やパンデミックみたいなのが無いとして、でも普通に行っても駄目でしょう」

桜田「でも、やっぱり無理矢理でもやるんでしょうね」

水島「ああ～」

桜田「うん」

水島「みっともない形で」

桜田「うん」

水島「なるほどねえ」

桜田「だから、やめたらええんやないですかっていうことについて、ストップをするという習慣っていうのが、日本社会には無いんですよね」

水島「なるほどね」

桜田「うん」

水島「まあ…」

桜田「だから前に典型的なのは、太平洋戦争に行く時に、まあ、誰が考えたって、そんなアメリカと戦争なんかを起こしたってね、どうなるものでもないっていうの、みんな、分かっているにも拘らず行ってしまうという。ああいうのはねえ、やめにしようって言っているんだけども、またぞろ何世代か経って、あの時代を生きて来た人達が亡くなってしまうと、ほら見たことかと、また同じようなことをやっているというのを、やめた方がいいのに、どうしてやめられないのっていう体質が、ずっと続いてしまっているっていうのがね」

水島「う～ん。だから、まだ、あの辺のことは行くも地獄、行かぬも地獄とね」

桜田「そうですね」

水島「ルーズベルトが仕掛けたとか色んな話があるけど、でも、これは維新しか責任が無いでしょっていうね」

桜田「う～ん」

水島「そういう気はするんですけどね。だから、その維新自身が物凄く損してヤバいっていう状態にならない限りやめないっていうことですね」

桜田「うん、多分、そうですねえ」

水島「自分の身が危ないとかが無い限りは」

桜田「ええええ、ええ」

水島「MGMのマフィアさんが、もし、お前って言えば、やめるかも分かりませんが」

桜田「うん」

水島「ただ撤退ですよ。今、そのことを聞いてね、2026年にそれがあるっていうの、ちょっと驚いたんですけど、この政治主導の怖さですよ、これ、本当に」

桜田「うん」

あんどう「そうですねえ」

水島「政治って、あいつら政治家じゃないからね。ゴロツキだよ、ほんとねえ。こんなことを考えると。まあ、ちょっと失礼ながら言葉が過ぎたようでございます。どうですか」

あんどう「はい。まあ、やっぱり決めたからやれと役人に言われているのと、多分、予算がかかりますよっていうことは役人も言えないんでしょうね。金を使うな、金を使わないで何とかしろと、知恵を出せって恐らく言われていて、いや、そんなことを言われてもっていうので困っているっていう状況だろうと思うんですよ」

水島「そうですねえ」

あんどう「これは多分、大阪だけじゃなくて、国も同じことが起きていると思うんですよ」

水島「まあ、体質がね。うん」

あんどう「体質が同じですよ」

水島「そうですねえ」

あんどう「政治主導で、とにかく無茶言っって、もう、そういう政治家、いっぱい居るんですよ。俺は決めたんだと。あとは役人に、お前が考えろとか言っってね」

水島「うん」

あんどう「役人、丸投げされて」

水島「それが役人だろうみたいなね」

あんどう「知恵を出すのはお前らだ、みたいなことを言われて、どうしよう」

水島「そう」

あんどう「多分、室伏さんは、あまり言われてないのかもしれないけど（笑）、そういうこ

とを言う政治家が今、多いんですよ」

水島「いやいや、そうですよ」

あんど「それが政治主導って勘違いしているんですよねえ」

室伏「まあ、今の行革担当大臣なんか、その典型ですよ。あの人ね」

あんど「そうですよねえ」

室伏「デジタル大臣か、あの人、典型ですよ」

水島「う～ん。いやあ、だから本当にねえ、この問題は、やっぱり、日本全体が持っている体質で、特に維新の中にそれが表れているっていう感じだけでも、でも直接、被害を受けるのは国民ですからね。結局、本当にちょっと何とかしなきゃいけないんですけども…」

桜田「IRの問題ですとね、今の話とね、ひとつ、あるんですけどもね」

水島「はい」

桜田「国交省が何度か、この交渉に行った時にIRの色々な認定するにあたっての手続きに、法的な瑕疵があれば認定を取り消すってことを言ったんですね」

水島「うんうん」

桜田「認定を取り消せば、どうなるかと言うと、期間が過ぎていきますからね」

水島「はい」

桜田「事実上、その事業が出来ないってことになるんですけども、その認定が取り消させるような案件が、実は、今、大阪で裁判で進んでいて…」

水島「ああ、どういうことですか」

桜田「つまり428円という賃料を設定したんですけども、IRの事業用地ですね」

水島「はい」

桜田「1平米辺り428円という賃料設定ですが、これが不当に安過ぎると。例えば、駅前の一等地であるにも拘らず、その最寄り3.5キロ離れた所であるとか、それからIRという商業地化できるにも拘らず、いや、それは一般のスーパーマーケットのようなものが出るっていうことを想定してやるとか、極めつけは、大阪市の方が、この値段で設定してくれというのを不動産鑑定業者に言っているんですね」

水島「ああ、それは違法ですよねえ」

桜田「そのメールが出て来たんですよ」

水島「ああ～、それは凄いな」

桜田「うん。それを今、証拠にしながら裁判がずっと進められて来ていて、もし最後、まあ、裁判所が証拠に基づく訴えを、きちっと認めてくれれば当然、認定に瑕疵があるということになりますから、そうするとIR計画、根底から崩れてしまっただけっていう話になるんですね」

水島「そうですねえ」

桜田「だから、それをやろうとすると、その裁判所のレベルで、この計画を全部、止めさせるっていうことになってしまうから、裁判官に相当、大きなプレッシャーを与えられて恐らく言い逃れが出来るような判決が出るのかなあということも一方で考えながら、他方でやっぱり公正な裁判が、もし行われたら、これだけの証拠に使うて明々白々な事例なんだから、その認定取り消しというところに行かないかなあということ期待しているんですけどね」

あんど「原告は何処なんですか」

桜田「原告は住民監査請求から始まったんですね。住民監査請求が始まって、それに基づいて住民訴訟を起こして…」

一同「ああ〜」

桜田「その中で証拠が色んな形で出て来てという経過になっています」

出原「あれも凄い、もう一回、メールを消したとか言ってね」

桜田「ええ、ええ」

出原「もう一回、向こうは隠蔽したんですけど、あとで場探ししたら、何とか、あったということで、奇跡的にやったという住民の素晴らしいパワーです」

水島「そういう証拠がね、出る場合も」

出原「はい」

水島「ただ確かに、今の裁判の裁判官にそれだけの大きな事に対して、そうだって正義っていう風に言える度胸があるかどうかね」

出原「うん、そうですね」

水島「大体、国の方針に従っちゃう裁判官が今、多いですからね。司法って言っても。ただ、元々がそういう状態ですね、これねえ、IRっていうのは」

出原「もう一つ言いますとね、例えば、この夢洲署というのが出来て、警察官が300人以上、来るんですよ。僕は、警察の幹部の方に、ちょっとお会いする機会があって、公安の方と話した時に、とにかく犯罪が増えると。マフィアも来るし、海外から外国人も来るし、もう日本人も拘られて、自己破産、増える訳ですから生活保護も増えるということで、その中で大阪府警自体は、吉村さんが予算権を持っていますでしょ、だから、そこですよ。維新さんは中々そこに踏み込め…」

水島「踏み込め難いんだ」

出原「メス、入れられないと。何が事例かと言うと、東大阪の市長選挙、思い出して戴くと、市長選挙の時に元々自民党で出ている野田さん。今の現職の市長さんが急に1か月前になって維新に鞍替えしたんですよ」

一同「うん」

出原「これは樽本さんっていう市議員さんがパクられて、ある会社の社長からお金を貰っ

ていたと。その野田さんも掴まされていたみたいだということで、樽本さんは結局、捕まっているんですね。野田さんは行けたんですよ。というのは何かと言うと疑惑の段階ですよ。これ、維新に入ったんです。維新に入れば結局、予算権を持っているというところに於いて助けて貰える。だから自民党は公認を立てられないんですよ。もう告示の一か月前なので。

だからブリ怒ってはるんです。ですから東大阪の行政も、みんな、反野田勢力。行政も議会も。あの自民も公明も維新すらね、野田さんとしっくりいっていないんですけど、元々自民党やけども、確か万博の意見書は自民党も反対を出したんですよ。通っているんです。何故かと言ったら、自民党は反野田ですよ。自民党って今回、万博を進める側じゃないですか。

それでありながら、維新さんは、真っ直ぐ、手を挙げて賛成したけど、自民党は反対しているんですね、議会が。行政も反対しているから今、もう東大阪議会は進んでないんですけど、それは置いておいて結局、今、それだけ、やっぱり維新さんは強いんですね」

水島「うん」

出原「どんどん交番なんかも無くしてしまっていて、貝塚でも、この4月に交番が一つ無くなってしまっていてね」

水島「ああ〜」

出原「もう人手が、どんどん減らされている状況ですよ」

水島「ほんと、いざとなったら、それがねえ、コロナと同じ状態になって来るっていうねえ」

出原「はい。そういう状況です」

水島「外国人も入ってきますしねえ」

出原「はい。そうなんですよ」

水島「いやあ、本当にヤバイことだという。皆さんね、これ、事実ですから、私は、もう、はっきり維新は駄目だっていうのを、個人としても主張しますけどもね。今のなんかは事実の話だからね、こういう状況になって政治主導とか改革だ何だって言う人達が、実は極めてファッショ的になって言うか、全体主義的な傾向があるということも、やっぱり、我々はもう一回、改めて確認しなきゃいけないという気がしますね。

ただ、この万博、IRは大きいイベントですからね。うん。まあ、それぞれ、この問題について、私は、やっぱり一番、注目しているのは世界情勢との中で、菅さんっていう人がね、実は、今の政局的な問題でも、次の総裁は誰にするとかね、ああだこうだ色々動いているという中で、実は、維新の陰の親分は菅だということを考えると、それで菅さんの後ろに居るのは、前に外務省のホームページに出たのが、官房長官時代にアメリカの金融資本家と全部、会っている。官房長官って基本的には、あんまり外遊しちゃいけないでしょ」

あんどう「外遊はしてないですよ。多分、来て会っているんじゃないですか」

水島「いやいや、一回、行っているんです」

あんどう「ああ、一回ぐらい行ったかもしれない」

水島「一回、アメリカへ行ってね、その…」

あんど う 「あぁ、一回、行っていますね」。

水島 「訪問した写真を何故、あんな公式に外務省のホームページに国際金融資本家達と会っている写真を載せるんだっていうことは、これは、みんなに知らせる。次は菅だぞと」

あんど う 「次は総理だぞってね。次の総理っていうね」

水島 「というようなことをね」

あんど う 「顔見せですね」

水島 「解ったんでね。ところが政治家は竹中とかああいうのと、みんな、また、くっついていっているっていうね、うん、誠に見事な構図でね。ただ、この流れが今、アメリカの大統領選挙、みなさんね、トランプが暗殺されかかったりとか、また、急に何故か極めて評価の低かった、ねえ…」

あんど う 「ハリス。カマラ・ハリス」

水島 「彼女、ハリスがね、オーバーして、今、有利になっているって、これ、嘘だろうっていうことを含めて、今、そういう中で、この万博というものと、もう一つは、彼らがやりたかった、そういう勢力っていうのは、実はバイデン政権側のね、まあ、取り敢えず、それと、もう一つ言えば、はっきり言えばMGMとか、ハリウッドの映画会社の基本は、ユダヤ資本ですね。こういう人達が今、あちらの中東の方では戦争を起こそうとしている。

今日も30人、昨日も30人って学校に爆撃を加えて無慈悲にやっちゃっている。やれるところだけやっちゃうっていうね、もう挑発し続けている。我々も前にイランは、よく我慢しているなって言ったけど、これで我慢できないだろうという、今日か明日、この何時間後に、この反撃っていうのがあるかも分かんないけど、そうしたら、またネタニヤフは反撃するって言っていますから、これ、IRを理由付けてやめますかね。それとも、あんど う さん、これは、どう思います」

あんど う 「いや、もうMGM側は自分の利益だけ考えるでしょうから、撤退することは充分、選択肢に入っている」

水島 「ありますよねえ」

あんど う 「最初から自分のところは害を被らずにやめるっていうことで契約していますよね。だから、いつでもやめられるよ。俺は手を引くぞっていう…」

水島 「それで、やめても、またね、ちゃんとやるなら、また行ってやってもいいぜみたいなことは、いくらでも言えるから、向こうが100%有利ですよ」

あんど う 「そうです、そうです。はい」

水島 「う～ん」

桜田 「スポーツ賭博の利権、持っていますからねえ」

水島 「そうですよねえ」

桜田 「MGMは。だけど今日は…」

水島「おお…室伏さん、これね、ああ、どうぞ、はい」

桜田「ええ、あれを観ていたらホリエモンが一生懸命、スポーツ賭博をやれ、スポーツ賭博をやれ、っていうことを言っていたんで」

水島「ああ、いや、もうホリエモンも完全にね、前に、日本のテレビ局の乗っ取りで、あれ、皆さん、ライブドアが金儲けているんじゃないくて、金融資本から全部、ホリエモンを使ってお金を出して買い取らせようとしたとか、完全に、あの人はそっちの手下と言うか手先ですから、その辺は、今、おっしゃったように見ておいた方がいいと思いますね。ああ、スポーツ賭博やれって言っているんですか」

桜田「そうです、そうです」

水島「(失笑) さすが、あのう…」

桜田「オリンピックにかこつけてね、う～ん、うんうん」

水島「なるほど(苦笑)、まあね、こういう人達が今、動いているんで、ただ、あまりにも、そういうバックに居る人達も維新を過大評価し過ぎてというか、こんな馬鹿とは思わなかったというね」

桜田「(笑) う～ん」

水島「これは、やっぱり、結構、苦労しているでしょ(苦笑)」

出原「私も中国へ行って、ひとつ言いますとね、一回、大連へいったあとに長春というところに行きまして、長春は何故、行ったかって言うと、その当時、李天然総領事の祖国だということで行ったんで、そこも旧満州で満州帝国も見に行きましたけども、行ったあと、帰りの列車の中で、急に何か物々しい音がなって、いきなり地下の方の核シェルターに連れて行かれたんですね。僕は、ちょっと怖いなと思ったんですよ。

今井さんと一緒に連れて行かれて1時間後に出して戴いた時に、何があったか言ってくれないですね。向こうの警察当局に聞いて欲しいと今井さんが言いまして、まあ、皆さんも一応、日本維新の会の副代表、代表の代わりに国賓待遇で行っていましたから、ちょっと、おかしいじゃないかっていうことを言いましたら、実は、今この上を、凄い、びっくりするんだけども金正恩が…」

水島「え？」

出原「金正恩がね…」

水島「ああ、金正恩。はい」

出原「走ったと。皆さん、覚えていますかね。6～7年前に秘密裏に北朝鮮から列車で中国に入りましたよ」

室伏「はいはい」

水島「はい、はい」

出原「たまたま、あの時だったんです」

水島「ああ、なるほど」

出原「その時に、丁度、我々バッティングしたんですよ」

水島「ああ、あそこ、丁度、満州だからね」

出原「そうなんですよ。地下に埋められまして、びっくりしましたね。あとで聞いて、もう一つビックリした訳ですね。まさか、そんなことがあるかなと（苦笑）いうことで、いや、二度と行きたくないわと思いましたけど…」

水島「なるほどねえ。でも、いい経験でしたよねえ」

出原「でも、そうですけども、それ以外にも色々経験しましたが、だから、よくね、帰ってから、色々向こうの維新の府会議員や市会議員さんと、そういう話は出来ませんから」

水島「うんうん」

出原「ただ彼らも行って来る訳ですよ。今井さん達と。みんな、行っています。やっぱり、そういうことでね、何とかトラップとかありますけどね、万博カジノから何々みたいなね、結局、そういう中で、これはIRはやめられないんじゃないかなあと、僕が思うのは、そこも一つある訳ですけども」

水島「なるほど。はい」

出原「まあ、ひとつ、ちょっとした今の話ですけどもね」

水島「なるほどね」

出原「そういう経験もありました。はい」

水島「いや、だからね、それと、もう一つ、その話を聞くとね、中国とか外国の人達は中国に限らず結構、強かだね」

出原「そうですよ」

水島「色んな二重三重のね、そういうのがあから維新のような子供みたいな杜撰な政治家なんか一発で丸め込まれたり、買収になっちゃったりする可能性が凄くありますよね。まあ、今、他の政治家も、そういう風に言えば言えるんですけども、いやいや、いや、結構、夏のホラーみたいな感じになって来たなあ」

一同「(笑)」

水島「最初は、ちょっと面白くないけどね、いい加減な仕事をやっているっていうぐらいのことだけど、IRまでそうになっているっていうね」

出原「いや、本当にびっくりしました」

水島「それは凄いですよねえ」

出原「はい」

水島「はい、歴史的に見るとどうなりますかね。ここまで日本が来たかっていうね、一つ、私は技術とか、そういう職人仕事っていうか職人国家っていう形で、何か一個、やる時は、

いい仕事をきちっとやり遂げるっていうのが、普通、あるじゃないですか。でも、この杜撰さって、だって、さっき言ったトイレの話も水道の話も聞くと、普通、何か造る時は最初に考えるでしょ。エネルギーとインフラ、水道のことや何も考えてなかったということですよ。

それと、これは多分、視聴者の皆さんも初めて、今、桜田さんのお話で聞いたと思うんだけど、夢洲がゴミの島っていうことぐらいは、みんな知っていたんだけども、その地下に、どうなっているかっていうね」

桜田「そうです、そうです」

水島「だから必ずメタンガスは、ずっと出続ける」

桜田「そうですね」

水島「もう半永久的に出続ける訳ですよ」

桜田「うん」

水島「そういうようなインフラの中で、今、我々が出来る事って何だろうっていう気がしますが、今、何が出来ますかね。とにかく止めさせることですかね」

桜田「うん」

水島「言う事を言っておかなきゃいけないっていうね」

室伏「でも、その万博にしても、それからIRにしても、IRは、これから話をしますが、多くの国民って殆どの国民が現実を全く判っていないで、結局、情報番組とかで、あの変な怪物が出て来て、吉本芸人が出て来て、わあ～ってやって、あれでIRが出来てカジノで、いえ～いっ！みたいな」

水島「うん」

室伏「実態を全く知らない連中がそうやって喜んでる訳じゃないですか。あとね、もう、何年前ですけど、この話はIR、カジノが決まった時にラジオ番組で公認会計士だか税理士だとか称するコメンテーターが来て、凄く楽しみで期待していまあ～すとか言っていたんですよ」

水島「うん」

室伏「大丈夫か、お前はと。そんなもんを流すラジオ局は大丈夫かっていう状況ですけど、恐らく、その状態が何年経っても、ずっと続いていると思うんですよ」

水島「ああ」

室伏「だから、その実態を判らせるようにしないと、もう何を言ったって大丈夫だよ。何とかなるよっていう、まあ、だから維新並みの発想になっちゃうと思うんですよ。しかもね、維新自体は完全に、もう今だけ、金だけ、自分だけ。自分にお金が入ればいいのか、自分が当選し続けられればいいのか、自分が権力の座に居られればいいのかっていう、まあ、自民党もそうですけど、そういう状況になっている訳ですから、あの人達、何かあったら逃げるか、その地位を使って何かやるかしか、恐らく無いと思いますし、あとは野党側ですね。一応、

維新も野党ですけど、他の政党ですよ。他の政党も結局、カジノという話になった時に、カジノの推進議連って超党派でしたから、私も超党派の総会、仕切り直しの時、見に行きましたけど、国民の玉木さんも入っていましたし小沢一郎さんも入っていましたし、皆さん、そういう期待をしていると言われるし、あとは、結局、野党側が問題視するのは何かと言ったら、依存症の話ばかりですから、本質的なところに対してフォーカスは全くしてないんですよ」

水島「そうだよね」

室伏「ええ」

水島「だって、本当は野党もしっかりして、小沢一郎なんていうのは論外かも分かんないけども、野党が、この問題をね、しっかりやることは出来たはずだよ」

室伏「いや、そうです、そうです」

水島「今の話を聞いたら、ええっ！て言うねえ、本当にびっくりするぐらいだからなあ」

桜田「IRの法案が通る時に、最初は、安倍さんがねえ、ヒラリーが勝っていたらカジノは無かったっていう話があって、そのあと2週間ぐらいで二階さんの態度が変わってね。年末に向けて、その一瀉千里で法案成立に向かって行ったんですね。だから、貴方達は本当に、真剣に考えていたのかと言えば、やっぱり、必ずしも、そうではなかったっていうんですね」

水島「そう思いますね」

桜田「それから岩屋さんとか萩生田さんとか、カジノの法案を通す為に必死に頑張っていた人がね、法案が通ってから一切、口をつぐんでしまって、何も無かったかのような態度をとっているということとか、それから報道で言えば、例のあの水原事件があってね、水原さんは最初の賭博は10ドルですよ。10ドルを賭けて始まったのが、最終的には、16万ドル、一回の勝負に賭けるようになってしまった。1万9千回、賭博を繰り返した。勝ったお金が213億です。負けたお金が270億で、その差額が60億だって言うんだけども」

水島「凄いですねえ」

桜田「200億の勝ち負けしているという所に足を突っ込んでしまったんだという報道は、残念ながら一切、していないんでね」

水島「いや、そうですよ」

桜田「うんうん」

水島「今、聞いてね、所謂、バンバン使って借金が、このぐらい使い込んだっていう、あのう、彼からね」

桜田「ええええ、ええ」

水島「というのが、よく我々が聞いた話でね。今、儲けたお金が、このぐらい」

桜田「そうです」

水島「もう一回、言ってくれますか」

桜田「日本円で213億円、勝って、270億円、負けたので五十数億の借金があって、その内の25億円を大谷の口座から引き出して払ったと。だから残りは、まだ30億、40億弱、残っているんで、じゃあ、その残った40億の借金をアメリカのマフィアの人達が黙って見過ごすかというね」

水島「そういうことですね」

桜田「うん。はじめをつけんかといっていう話にね」

水島「ああ、多分、だから、今は裁判とかやったりしているけど、そのあとの問題はね、色々と間違いなく出るでしょうね」

桜田「そう。どうぞ」

出原「あの時に、でも、そのワイドナショーとか、やっぱり、どうしても大谷なので、結構、出ましたでしょ」

水島「はい」

出原「それで奥さんはどうなるかとか、ギャンブル依存症の特集番組が組まれたんですね」

水島「はい」

出原「僕、政党支持率を見たんですけども4月、5月で維新だけが急降下しているんですよ」

一同「う～ん」

出原「あれを見て戴くとグッと下がっています。今年に入って1月、2月にちょっと下がっているんですけど、これは、ある人が辞めたっていうのもあるんですけど、ちょっと言い難いんですが、あるんです。4月、5月に一気に、また下がっているんですよ」

水島「うん」

出原「これが丁度、水原さんの事件のことですね」

水島「なるほど」

出原「今回、また7月に一気に下がったのは、これは兵庫県知事のパワハラ問題ですね」

水島「ああ～」

出原「ええ。それで亡くなられた方が二人も居る」

水島「そうですねえ」

出原「これが全国に轟きましたんで、ただ、今、確か去年の統一の時に、支持率が9%からいっているんですけども、今、千万票ぐらいの支持率が半分になっています。500万票。所謂、政党支持率から言うと5%ないぐらいになっています」

水島「うん」

出原「今、維新は、かなり下がっていますので」

水島「そうですねえ」

出原「このネット依存の話であるとか色んなパワハラの問題、まあ、これが維新の体質であり…」

水島「うん。そうですね」

出原「そして、それ以前には色々な問題、こういった維新の議員の質の低下ですね」

水島「うん」

出原「これは甚だしくって、この内、貝塚もそうなんですけど、今度、阪南市長選挙が10月20日にありますが、実は、先日の休みの日、二日前に吉村さんが病みあがり、現市長と討論をやっているんですね。サラダホールって500人が入る所ですけど、私も、よく、あそこへ応援に行ったので知っているんですけど、4年前は、かなり埋まったんですよ」

水島「ああ、行く人がね。はい」

出原「はい。人も。今回、吉村さんが行っても200やったんです」

一同「ほお」

出原「埋まらないんです」

水島「それは激減ですね」

出原「激減です。動員をかけても埋まらないです」

水島「なるほどね」

出原「ただね、これ、実は、都構想の時、丁度、4年前の都構想の時、私も未だ、その時は維新だったんですけども吉村知事が来たら動員をかけるんですよ」

水島「ああ」

出原「それで議員一人、30人」

水島「ああ、連れて来いと」

出原「はい。その時に、私は平野区だったんで、公明党は石川博崇さんですね。地元の方で。石川さんが来たら、もう物凄い人気なんですよ。あそこは、平野区っていうのは20万弱の平野区民ですけど、四分の一が市営住宅で公明党の応援の人が非常に多いんですけどね」

水島「うん、地盤ですね」

出原「地盤と都構想で負けたところで、吉村さん、何回も入るんですけど、相当、動員をかけて、あれは虚飾なんです、実は集まっているんじゃない、みんな、ノルマがあるんですね」

水島「ああ。なるほどね」

出原「ええ。ですから維新は集まるっていうのは、実はそうではなくって、その延長で、今、去年の統一は勝ったんですけども、段々と吉本さんや在阪メディアが持ち上げたんですけど、大分、メッキが剥がれて来てまして、もう政党支持率も、実際の支持率っていうのは本当は低いんですけども、ネットは絶対、調整できませんのでリアルに出ています」

水島「うん」

出原「ただ、メディアとかが煽りながら表面上の支持率は変えることが出来るじゃないですか。というところの部分でやっていたのが、段々と去年4月以降、丁度、馬場さんが公明党の対抗馬に大阪の4か所、立てる」

水島「うん」

出原「8月には関西の6か所で立てる、立てました」

水島「うん、立てましたね」

出原「一気に下がり始めたのは、これは多分ですけども、それぞれメディアや週刊誌の公明党の黨員さんの記者さんが出して言っているんだろうなと思っています」

水島「うん、なるほどね」

出原「なので、段々と維新が剥がされて行って、今回の万博、カジノで下手を打って一気に、表出しているじゃないかなあというのは感じておりますね」

水島「いやあ、だからね、前も、そういうところも注目してね、もっと言うと、菅さんという背景があるのと同時に、CSISっていうアメリカのナンバー2ぐらいと言われるシンクタンクが創価学会、公明党を解体するっていうのを2年前ぐらいでしたかね、出しましたよね。だから公明党は、これから自民党政権に叩かれますよと。自民党も、はっきり公明党に対して凄い冷たい態度を段々執り始めて、それで、あのお馬鹿さんの維新が、じゃあ、それに乗かって馬場っていう男が、各地で公明党と対抗させる。やっつけるということをやったけど、情勢を見誤っているっていうかね」

出原「そうですね」

水島「現実的な根強い創価学会の人っていうのは、私は信仰とは全く別なんだけど、真面目で、生活とかする人が多いから、それを、ちょっと間違えるっていうね。政治の中で、雰囲気の中で戦うっていうやり方をしちゃったんだろうと思うんですね、維新はね、雰囲気。それで返り討ちに遭うみたいなね」

出原「そう。そうですね」

水島「それで公明党もCSISのことはちゃんと解っているから」

出原「はい」

水島「アメリカの、そういう支配層が公明党とか創価学会、統一教会とあれと同じようにね、役に立たないものとして片付けようとした。でも片付かないですよ」

出原「片付かないです」

水島「所謂、宗教心を持っている人とか、そういう人が居る訳だからね」

出原「はい」

水島「そんな簡単に潰れないっていうことが証明されちゃったと」

出原「はい」

水島「別に私は公明党を応援している訳では全くないですよ。意見が違いますから。ただ、そういうようなことを、維新は上から言われると平気でやってね、情勢も分からないような、それこそ、あんどーさんの言う政治主導でやってみたら、しっぺ返しを食らう。現実には、何も対応できないってことが表れて、私は本当に消滅させるしかないと思うんですけど、ただ浮ついたグローバリズムの政策をね、お先走りでガンガンやって来たのが、改革だあ、規制緩和だあとかね、そういう行政改革だとか言って、いい加減なことを言って、それから、大阪の自民の諸君には悪いけど、やっぱり駄目なところがあつたのを、そこに付け込んでね、やっぱり、それは伸ばして、だから、こういうことを教えたところもあると思うんですけどね。維新の人達は、この支配のやり方とか極めて全体主義的な危ない感じが、私なんか最初からあって、それで今回の場合も松井さんがね、いち早く辞めた時、私は言ったんです。

ああ、もう、こいつ、解って逃げちゃったってね、でも、これは橋下さんを含めて、みんなに責任をとらせなきゃいけないですよ。というようなことが、やっぱり、あるっていうのは、今日はIRと万博だけじゃなくて、そういうグローバリズム政党の生まれて伸びていくことと駄目になっていく姿のねえ、あれは万博の姿と、或いはIRの姿と凄く繋がっているということがよく解ったと思うんですけどね」

室伏「そういう意味で言うと、結局、水道コンセッションもそうですし、あとライドシェアもそうですけど、結局、世界各国でオワコンになっているんですよ」

水島「ああ、ああ」

室伏「ライドシェア、海外、乗りましたって言っている人が居るんですけど、完全に規制をかけているので、日本で言えば道路運送法に基づいてハイヤーをやっているのと同じなんですよ」

水島「ああ。ああ～」

室伏「まあ、ちょっと規制の在り方って各国によって色々違いますけど、でも、少なくとも規制の中でやっているんですね。ところが知らない人が多いから、簡単に騙されちゃって、結局、世界中でそうなっているから、でも日本って未だラスト場、つまり丸々太った豚が極東に居るので、そこでやろうと言って新経連とかね、そういうのを使って来るんですけど、必ず推進側に維新が居るんですよ。水道コンセッションもそうじゃないですか」

水島「いや、そうだねえ」

室伏「色々やって、結局、纏まらなくて当時の橋下市長と各府下の市長が会議なのに喧嘩してゴラァーみたいになって、結局、纏まらなかった、まあ、あれで良かったんですけど。そういう形で、とにかく何だろう、さっき色んなホリエモンの話が出ましたけど、結局、維新も、その手先になっていて、更に下に居る地方議員とか、新人の国会議員なんかっていうのは、正に使って走りになって、とにかく拡声器みたいにして言う役割を果たしているっていうことを考えると、最後のラストリゾートである日本を狙われているっていうことなんですけど、やはりそこを断ち切れないと、そういう日本を食物にしようとしているグローバル勢力に対する反転攻勢にはならないっていうことですね」

水島「その視点、もってやらないと本当に、ちょっと中々ねえ…」

室伏「大阪だけのなんとかって見るんじゃないくて、そういうコンテクストで見ると、やっぱり、色んなものが見えて来るのかなと思いますね」

水島「だから、その担い手と維新が、あまりにもお馬鹿さんと言うかねえ」

室伏「ええ」

水島「こんな無能で無責任なグループだったっていうのが、グローバル勢力にとっては予定外の事だったかも分かんないですけどねえ、ああ、川端さん、ちょっと戻られたんで、川端さん」

川端「はい」

水島「今、色々出ていたのは、I Rも、もうメチャクチャだというような空恐ろしい話なのでインフラ整備も何も出来ていないということと、もう一つ、今、出ていたのはイランとイスラエルですね。中東の戦争が起きる可能性が非常に高まっていると言われている。石油の問題、供給の問題もあると。こういうような形の中で万博自体、或いはI R自体も辞退するのではないか。

MGMは26年で、もうやめたっていうことも出来るみたいだね、こういうことを含めて、石油が止まれば勿論、やめる理由になるんですけど、各国も戦争が始まると、パビリオンに出展なんていうのも、もうやりませんっていうのが出てくる可能性があって、逆に、維新の大阪府の吉村さんが助かるんじゃないかとか、色々出ているんですけど、やっぱり、相当ね、このグローバリズム政策の破綻と言うか、まあ、維新の姿ですけど、これで、こういうことをやろうとしていたっていうものが今、破綻しかかっているっていうのがイメージですけど、川端さん、この辺の世界の中での、こういうI R、或いは、何て言うんですか。万博。この辺は、どんな感じで見えていますか」

川端「すみません、途中で抜けていたので話が、ついていけないところもあるかと思うんですが、今、先生方、おっしゃっていたグローバリズムの問題で言うと、維新の会って確かに、表面的に唱えているお題目はグローバリゼーション的と言うか新自由主義的と言うか、正に、室伏さんとかが普段から批判なさっているような、そういう奴ですけども、ただ維新って、結局、何かグローバルな世界の中で言えば、やっぱり田舎者感が抜けきらない人達で」

一同「(笑)」

川端「要は、その題目としてはね、グローバルっぽいことを、グローバルっぽいと言うか、今風なことを言うんですけど、でも、それをやり切って何か新しいものを作るっていう感じになっている訳ではなくって、元々大阪府の行政の在り方に色々前の人がやってきたところに、いちゃもんをつけるっていうところで…」

水島「うん。まあ、そうだよな」

川端「何か、こんな無駄があるとか公務員が給料を貰い過ぎだとか何か地下鉄で無駄があるとか、そういうのをケチをつけるっていうことだけやって来た人達で、何か新しいものを創り上げている訳じゃないんですよ。だから、それって、実は本当の意味ではグローバリズムじゃないと思っている、ただ本当にイギリス人とかアメリカ人の本物のグローバリストって、あんな生易しいもんじゃないので」

水島「その通りです（笑）」

川端「正に国を乗っ取らんとするぐらいの勢いで新しいルールを作り、お金を動かし、人を動かしてという風にして、そのシステム全体を創り上げる訳じゃないですか」

水島「うんうん」

川端「維新って今迄、それをやる事を全く問われていなかった訳ですよ（笑）」

水島「まあ、そうだね」

川端「要するに、だって自民党とか既存勢力とか、他の人の悪口を言ってりゃ良かったから、左翼の悪口を言うっていうのも、それに含まれるんですけど。だから、それが正に、今回、IRみたいな大きいことをやるとか、万博っていう大きいことをやるっていう場面で、何か担わされた時に、初めて一番、出来てないところが最も顕わになった瞬間じゃないかなという意味では…」

水島「まあ、そうですね」

川端「今日、冒頭で、あんどろ先生がおっしゃったように、万博の招致を失敗すれば良かったなというのは正にあるんですけども、もしかしたら大事業をやらせた時にある一つの致命傷を負うかもしれないなあみたいに思います。ただ、ちょっと、そこを付け加えていくと、やっぱり日本の国民とか市民の見る目が、あまり厳しくないところがあって、維新の会って、そういう、やらかしがあった時のダメージ・コントロールがめっちゃ上手いです（笑）。何か、世の中の人から、取り敢えず有耶無耶に許させるっていうのに、非常に長けている人達で、大失敗しながら何だかんで誤魔化してしまうかもしれないと思いますが、いずれにしても、さっきのグローバリズム問題に関して言えば、全く筋金入りのグローバリストではないというのが個人的な印象です」

水島「まあ、それはそうですね（笑）。はい。稲垣さん、やっぱり日頃、稲垣さんも言っている出自という言い方だと、やっぱりスタートした維新の人達、松井さんにしろ誰にしろ、そういうところが、ずっと続いて能力の無さとダブっているって感じますけど、どうですか」

稲垣「そうですね、その筋道は笹川財団辺りから、或いは、そういった形、日本財団ですね。その辺りから、ずうっと続いて来て、ちょっとマッキン・ジェイ&カンパニーのグローバル政策を、大前研一氏、平成維新の会から名前と政策を次いでやってきた訳ですけども、そういった形で古い利権を壊したけども分断して、でも外国勢力に、それを付け替えていったと、外資ですね。そういった形でやってきたけども、実際の政治的な能力が、かなり低いんだっていうことが、ここで、かなり露見して来たっていうことだと思いますね」

水島「うん」

稲垣「ですから、まあ、丁度、我々のように反維新というか反グローバリズムでやっている私達にとっては、やっぱり良いチャンスであると。僕も関西人ですので、小さい時から吉本を育て育った人間ですから、維新の会の政治って結構、お笑いに出来ちゃう訳ですよ」

水島「うん」

稲垣「だから、つつい茶化しちゃうというか、例えば、今回の万博の政策の中に、生ゴミから出たメタンガスを、まあ、ガス危機に使うという形でSDGsの中にそういうのが入っ

ている訳ですね。そうすると、いや、それじゃあ、79本の大きなストローを地面に突き刺して噴き出してくるガスを使えばいいじゃないかとか、まあ、ちょっと本当に吉村新悲劇でありながら吉村新喜劇風なのが維新の会の政治なので、つついお笑いにしてしまう様なところがありますけど、大阪府民、市民の生活だけじゃなくて、本当に関西の地盤沈下に繋がってくると思いますので、ここは厳しく周知徹底して、みんなに維新が、どれだけ酷い政党なのか、もう、これからも有害以外の何ものでもないっていうことを知らしめていくかが、我々の課題になって来るのかなぁと思います」

水島「なるほどね。このおもしろい奴の政党と思われたけど、さっき、駄々下がりっていうね、支持率って考えると、おもしろい奴じゃなくなってきている、うん、冗談が冗談に聞こえないような話になって来ているっていう感じが今、指摘あったけど、やっぱりそんな感じですかねえ」

出原「そうですねえ…」

水島「支持率が下がるって言うのはねえ」

出原「結局、吉村さん、代表ですけども、日本維新の会に目を向けますと、馬場さんと共同代表なんですね」

水島「うん」

出原「吉村さんと馬場さんも全然、上手く行っていないと」

水島「うん」

出原「まあ、言いますと、松井さんも結局、吉村さんとやって来ましたが、馬場さんと中々、しんどくなってきているというのがあるんですけど、橋下さんを見て戴いたら解ると思うんですけどね、コメンテーターで色々言っていますけど、ただ単にコメンテーターじゃなくて、やっぱり、いまだに橋下さんも松井さんも会いますし、非常に力を持っているんですね」

水島「うん」

出原「うちの元上司の今井も、政治家を辞めた今でも、それなりに裏では中国関連とか色々なところで動いておりますよね。馬場さんとね、やっぱり今井さんと凄く仲が悪いんですけども、吉村さんと馬場さんって駄目な間柄ですよ」

水島「吉村さんと馬場さんが…」

出原「馬場さんが駄目なんですよ」

水島「なるほど。はい」

出原「これは幹事長の藤田さんと吉村さんも駄目なんですよ」

水島「なるほど（微笑）」

出原「僕が現職でおった時から目の前で喧嘩するんですよ」

水島「うん。うんうん」

出原「今、馬場さんも吉村さんとやっているでしょう」

水島「うん」

出原「これは万博、IR問題でもそうですけども、これ、始まっておりまして、斎藤さんの知事のコメントを見ても…」

水島「はい、兵庫県のね」

出原「兵庫県を見て戴いたら、よく解るんですけど、橋下さんは結構、厳しく言っていますよね」

水島「うん」

出原「馬場さんを、そこで結構、腐しているんですよ」

水島「そうですね」

出原「これ、凄く仲が悪いんですよ」

水島「うん」

出原「根本原因を見ますとね、よく考えて戴くと解るんですけど、元々維新の会って、まあ、さっき、おっしゃっていましたが自民党維新の会ってということで府会議員の団体が浅田さんとか松井さんとか今井さんとか東さんとか、何人かのメンバーで創っているんですね。まあ、浦野さんとか居ますけど、青野さんっていう人は辞めましたけど、結局、その府会議員が大阪市内で勢力を持とうと思ったけども、大阪では盲腸やって、府会議員って言われたんですよ。何故かと言うと、市会議員の力が強いんですね。大大阪の時代から。ということで、報酬も殆ど府会議員よりも市会議員の上ぐらいだったんですよ」

水島「うんうん」

出原「そういう中に於いて、この大阪で牛耳っていたところを、府会議員が創った維新が、潰したいっていう中に於いて都構想にすりゃあ、ええやんみたいな安易な発想があって…」

水島「ああ、なるほどねえ、ああ、それもあつたんだ」

出原「あつたんです。馬場さんは堺の市会議員さんですね。そこから言っているんじゃないですかと。松井さんの下で仕え、いい具合に代表になったと」

水島「うん」

出原「代表を再選されたのが去年の4月ですよ」

一同「うん」

出原「そこから、いきなり下がって来ているんですよ。公明発言があつてというところで、そこで松井さんや橋下さんは、やっぱり忸怩たる思いで見ているというところで結構、その人間関係っていうので成り立っている世界なので…」

一同「うん」

出原「ほんま、古い維新は旧態依然とした体制を潰すんやうて言うているけど、実は維新は古いですよ。古い体質ですよ。それは、先程、先生がおっしゃっていた通りで、維新はそこ

まで成熟した集団ではありません」

水島「つまり、政策的なとか思想とかイデオロギーのね、そういうもので、くっついている訳じゃなくてね」

出原「はい」

水島「ある種の利権と仲良しクラブ的な…」

出原「はい。そうなんです」

水島「だから悪くなると、もう、こうなっちゃう」

出原「そうなんですよ」

水島「でも、今、現実で言うと、出原さん、あれじゃないですか、殆ど、みんな、バラバラになっているっていう感じ」

出原「あ、そうです、簡単な話ですけども、やっぱり元々のチャーターメンバーは、皆、上がって行きましたけども、その下の段階の50代ぐらいの人達が今、せめぎ合いで、まあ、今回、横山さんが市長になりましたと。次に吉村さんが居なくなったら、横山さんはそっちへ行くんでしょうけど、中央官僚的な横山さんが仕切れるかと言うと、そんな甘いもんじゃありません。横山さんも勿論、府会議員でしたけども、まだまだ上にめっちゃめっちゃ濃い連中が、いっぱい居るんですね」

水島「なるほどね」

出原「その中で仕切れるはずもなく、そうした中で、どのように維新をやっていくかって言うと、実は、それぞれの市町で今、数を増やしました」

水島「うん」

出原「今、維新の票ってパイは決まっているんですね。それぞれの地域で大小あるけども、それぞれの地域でパイは決まっているのに、その都度、増やしていますよね。5人やったところで10人。貝塚でも、僕の時は3人やったけど、今度、6人です。次は7人、8人って言っています。パイは決まっているから潰し合いですよね」

水島「そうだよねえ」

出原「だから、お互い、めちゃくちゃ足の引っ張り合い。大阪の市会議員さん達もそうです」

水島「う～ん」

出原「もう女性陣も仲悪い」

水島「うん」

出原「だから男性達が、みんなて必死になって女性の市会議員さん達を宥める。それでパワハラ、セクハラ問題が出て来るっていう構図になっているんですね」

水島「なるほどねえ」

出原「はい」

水島「いや、こういうのが本当に現場のことを知っている方じゃないと判らないから」

出原「とんでもない」

桜田「経済人の会があるでしょう、維新の、あの人達は何か、そういう接着剤として動かないんですか」

出原「そこまでに動こうというところまでいっていないですねえ」

一同「ああ～」

水島「なるほどね」

出原「ええ。いかないですねえ」

水島「いや、だから、これね、実際、万博とかIRで期待されたグローバリズム新勢力としての力が無いことが、はっきり判った時、見捨てる人達が居ると思ってね、この兵庫県の、例のパワハラ問題というのも文春とかそういうのが色々採り上げているじゃないですか。

私は文春っていうのは完全にCIAの日本支局だと思っていますから、文春が採り挙げているっていうのは、アメリカっていうか、そっちの意図の問題もある。だから、どう扱うのかというね、これを見ているんですけどね。やっぱり、そういうところを見ていると、段々、この問題で見捨てる、維新の消滅とまでは言わないかも知れないけど、つまり、こいつらは、駄目だ、こいつ、あまり、日本の支配層になり得ないということは、もうエマニュエル大使を始めとして我々の国を支配している人達ですね、こういうのが、もう自民党もどうしようもなくなっているけど、岸田君は大変、素直だからね（苦笑）。対抗馬よりも維新の無能力というのは、今回のIRのところで、ほんとに出ちゃう。おっしゃったようにMGMの撤退というのは、本当にあり得るんじゃないかなと…」

出原「あり得ると思います。はい」

水島「桜田さん、どう思いますか」

桜田「どうでしょうねえ、僕には、やはりスポーツ賭博の利権というのも物凄く大きいと思っていて、だからランドカジノ、つまり夢洲に、そういうカジノを創るということについては興味が無いっていうね」

水島「いや、おっしゃる通りですね」

桜田「うん、だから、その権利だけはどうやって残すのかっていう…」

水島「そうなんです」

桜田「現状、やっぱりスポーツ賭博っていうのは未だ合法化されてはいないけれども、でも、やっぱり彼らの力をもってすれば合法化は簡単に出来てしまうような、そういう気持ちはあるねんね」

水島「だからIRをね、もし万博と同じでやっても、常に危険とか色んな物があって」

桜田「ええ、ありますね」

水島「リスクが大き過ぎるものでしょ」

桜田「うんうん、うん」

水島「その先の地面のあれを考えれば」

桜田「うんうん」

水島「そうすると大阪でやるっていうこと自体がね…」

桜田「意味がないですね」

水島「捨てないかも分かんないですよ」

桜田「そうです。そうですね」

水島「だから何か事故でも起きたり何かしてやるから…」

桜田「法律が出来ればね」

水島「理由出来るし」

桜田「うん、出来れば、うんうん」

水島「でもIRをやめる理由にはならないんですね」

桜田「ならないですね。うん」

水島「だから、そこら辺のところを、もう、あると思っているのが何かねえ、こういう政治主導は非常に怖いですね（失笑）」

あんどう「やっぱり維新の会が、ここまで勢力を持って来たのはね、やっぱり、水島社長、よくおっしゃいますけど、菅さんという役割が凄く大きかったと思います」

水島「うん、纏め役のね」

あんどう「やっぱりね、安倍内閣が長かったじゃないですか」

水島「そうですね」

あんどう「安倍内閣の時に、ずっと官房長官で居た菅さんっていう人は何で権力を持ったかと言うと人事で権力を持った訳ですよ」

水島「はい、そうですね」

あんどう「人事権を握って官僚を動かすっていう、謂わば、恐怖政治ですよ。それで権力を握って、それこそ横浜市役所も全部、牛耳って権力の味を占めていった人ですけど、それを多分、維新にも橋下市長とか橋下知事の時から、それを教えて、こういう風に権力を使うんだと。」

お前は首長だから、こうやって役人を使うんだっていうことを指示して、その通り動かして来たんだと思うんですよ。橋下市長は、やっぱり頭の切れる人だから多分、役人が何か言ってきたら、これは、こうこう、こうだろうっていうことで多分、言い返していたと思うんですよ。役人も多分、何か意見を言っても直ぐ言い返されちゃうから、もう意見を言うのをやめておこうと。変に反対すると、また飛ばされるし、みたいな感じで、多分、段々意見を

言わなくなると。恐らく松井さんも同じような流れで、結構、そうやって人事権を使いつつ、気に入らない役人は何処かに飛ばしつつっていうことで、菅流の人事をやって権力を掌握すると」

水島「そうですね」

あんど「それが多分、ずうっと続いていて、この万博、I Rにしても、役人が本当はこうなんだけどって言うべきなんだけど、そうすると、いや、お前が考えろって言われて跳ね返されてしまって…」

水島「兵庫県連みたいになる訳ですね」

あんど「そうですね。結局、今に至るっていう、本当に菅流の政治の一番、悪いところが、解り易い形で出て来ているのが、この大阪の万博、I Rじゃないかなって思いますねえ」

水島「思いましたね。いや、橋下さんの言質で思い出があるのはね、前に言った様に沖縄の独立論をね、県民投票で決めた方がいいって言ったんで、馬鹿、言ってんじゃないって私が言ったら、私を批判したから公開討論をやろうって」

あんど「うん」

水島「公開討論やったら、いや、それをやるなら僕は高いんだと。いや、1回、2回あったけど、200万円、2時間200万円が必要だって言ったんで、こちらが貧乏だと思ってね、そう言っていたんだらうけど、何とかするよと言ったら、今度は、そういう金を用意するだけが条件じゃないんだと。色々要求をちゃんと飲まなければ駄目って、結局、逃げちゃったけどね。

つまり、ほんと言えれば沖縄の独立論と県民投票っていうのは都構想と同じですけども、何も考えていないんですよ。多分、そういう風にやれば、みんな、喜んでくれるとかね、ということだけど、本当にちゃんと思想的なものをやると、橋下っていうのは逃げる奴だと。そういう体質は、よく解ったんだけど、今話を聞いていてもね、そういう何かパワハラ・テクニクとか、そういうテクニクは非常に学んで、狡いことをやれるんだけども、結局、いざとなると本当の事の行政とか政策とかいうものになると、全然、駄目だっていうね」

あんど「だから、そう考えていくと、やっぱり、この安倍内閣が凄く長かったじゃないですか」

水島「うん」

あんど「これの弊害って、実は、こういうことで出て来ているんじゃないかなと思うんですよ」

水島「ああ、おっしゃる通りだと思いますね」

あんど「うん、やっぱり辞めるべき時に辞めておこなきゃいけないと」

水島「う～ん」

あんど「もう、ここ迄私は辞めておきますと、あとは、もう、お願いします。あとは、もう後進に譲るとかね、そういう潔さっていか何か自分の政治哲学とかね、もう最後の方の安倍内閣って結局、長くやる事だけが目的になっていた」

水島「いや、全くそうでした」

あんど「そうじゃないですか。だから、ああいう姿を見せて、とにかく権力の座に居たら、美味しいんだなみたいな」

水島「うーん。うん」

あんど「そういうのを多分、維新の人達は凄く感じて、とにかく権力の座に居なきゃ駄目なんだみたいなね」

水島「そういうのも学んだんでしょうね」

あんど「居続けることが大事なんだみたいなね」

出原「それから、今、おっしゃっていたように維新で、私、思い出したんですけど、私は、維新塾4期生ですけど、最後に必ず橋下さんの講義が入るんですね。1日。10回あるんです。一か月に一回、あるんですけど、その一日目の最初は三浦瑠璃さんでしたね」

水島「うん。ああ〜」

出原「やっぱり色々な話をしていましたね。その時から、ソーラーがどうかと書いていたけど、まあ、それはいいんですけど、橋下さんが言っていたのは、やっぱり竹中平蔵ですね」

一同「ああ〜」

水島「ああ、やっぱりね」

一同「その考え方が非常に強かったです。今おっしゃったように菅さんっていうのは凄い存在だと思うんですね。裏ではですね。ただ、やっぱり竹中平蔵さんと共に一緒にやっていたという、先程、先生がおっしゃったように2012年の水道民営化構想、竹中さんと一緒にぶち上げましたよね。あそこで平松さんが何とか前の市長さんが止めて戴いたんですけど、当時、橋下さんは市長だった時ですけど、やはり、と言いながらヴェオリア社も大阪にもしれっと入って来ていますけど、やはり竹中さんが、この功罪の罪の部分ですね。

関空のヴァンシ社もそうですし、ロスチャイルド系ですけども、所謂、水道もヴェオリア社、ロスチャイルドですね。このオリックスの部分も入って来たり、このMGMも入って来たりしていますけど、全部、竹中さんが、ずうっと、この維新とやって来ているんですね。

僕は、もう、この人の罪って物凄く大きいと思ってしまして小泉政権時代から、ずう〜っと彼は大臣をやり、そしてしれっと橋下さんと一緒になって公金チューチューシステムを上手く作り大阪の公務員を切り、そして、そこに派遣を入れ大阪の利権は全部、竹中さんが結局、このお注射の時期もそうですけども含めて全部、パソナさんが入っているんで、何をしてくれたんやという風な思いは、僕は凄く強いです」

水島「全くね。だから、これは、もう何度も10回以上、言っていると思うけど、安倍さんの勉強会の時、私は、竹中、拙いでしょうと。竹中、外したらどうですかって言ったら、いや、あれは学者じゃないんです、水島さんと。あの人は政治なんですと。だから外せないってことを言っていましたけど、いみじくも、そういう意味で言うと、グローバリズムの世界のこういう人達の、やっぱり代理人にもなっていたし、だから、そういうバックで彼も

消せなかった」

出原「はい」

水島「それから、今、あんどーさんが言った様に、我々も途中まで実は安倍政権、救国内閣を創ろうって動いてやったんだけど、それで圧迫もあるだろうから出来るだけ我慢しよう。グローバリズム政策をね。とは言っていたんだけどもTPPとか何かだっ、最初は未だ決めていないとか、我々が言うと、問題も凄くあることは解っているからと言っていたんだけど、その1年目のアベノミクスが終わってから、もう雪崩現象のようになっていると。

これは、やっぱり菅さんとのパッケージが凄く強かったのと。やっぱり、もう最後は、我々も真ん中ぐらいですか、移民法、入管法を決めた時、我々は、もう安倍内閣は支持しないと。こいつは駄目だっという形で、反安倍、反安倍っというかね、まあ、なった訳ですよ。

だから、その過程がよく今のお二人の話とか今日の皆さんのお話でね、何故、そうなのかっていうのが、あの安倍晋三ですら、そうだったと。そうなったぐらい強かった。その中で辞めて、まあ、半分、辞めさせられたみたいなのところもあるんだろうけども、辞めて、元に戻ろうとした、あれも最初、私は疑っていたんでね。首相を辞めた時、直ぐ靖国神社へ参拝したんですよ。でも、何を言っているんだと。首相の最後の日に参拝しなきゃ、何の役にも立たないと。

貴方がそれをやったお陰で、現役の首相は参拝できないっという前例を作ったじゃないかっていうようなことも言って非難していたんですけど今、考えると、ある程度、本気だったんだなあ、前、山口さんの話でも、私についてのコメント、前に安倍さんが言っていたっということですけど、やっぱり、そういう思いはあったんだろうけども、あの政策は今、あんどーさんが言った様に徹底的に新自由主義的なグローバリズム政策、まあ、売国政策って言えば、言ってもいいぐらい。

だから、今でも安倍さんが全ていいっという人達については、私は、個人的な勉強会とか、長い付き合いがあったからあるけども、その部分は冷徹に、ちょっと新自由主義的な政策とか、やっぱり日本を駄目にした大きな力になっているっという、安倍さん自体もね。そこは認めた方がいいと、そのあと反省して直ぐ殺されちゃった訳ですけども、そういうことも認めなきゃいけないんじゃないかって思います。

そういう意味では、何か今日は万博の話だけど、そこに本当の事が凄く解った。IRのことまでねえ、今日は、お二人、皆さんにあれなんですけど、このねえ、間もなく戦争が始まるかも分からないという、油も止められるかも分かんない。我々の国自体は全然、フォローできていないです。

別にこれは維新だけじゃなくて自民党政権自体が今、とにかくバイデン政権べったりになっていたんで、何もフォローできていないんですけども、このIRとか含めて、私は、ここにある何ですか、いのちの輝く未来、あ、これですね、はい、もう一回、言っておきますね。

『くるぞ、万博』ね。『いのち輝く未来社会のデザイン』いのち輝く、だから、こういうこと自体は、この標語そのものが人間に対する理解とか洞察とか、喜びや悲しみや色んなマイナスもプラスもある命というね、だから、今度、戦争が始まる訳ですよ。それは能天気に来ないでしょう。いのち輝くっ言っているのに、あっちじゃあ、イラクやパレスチナや色んなところでは、イランでは人が死んでウクライナでは未だ戦争、続いている。

そういう中に、こういうものを、どう捉えるんだっていうね、ことまで考えなきゃいけない時代なのに、この能天気な何十年前のヒューマニズムっていうかね、うん、これは表れているっていうのがあると思うんで、皆さん、もう一回、万博の問題をを考えて戴きたいと思いません。

時間が段々、来たんでね、皆さんに一言ずつ戴きたいと思えますけれども、じゃあ、今度は、そちらの方から、稲垣さん、纏めになって来ますけど、今日のコメントを戴けますか」

稲垣「はい。今日は貴重な話が伺えて、大変、参考になりました。やっぱり大阪万博中止に向けて活動していかなければいけないなあと思ったのと同時に…」

水島「はい」

稲垣「まあ、先程から竹中平蔵であるとか菅元総理であるとか、そういった名前が出てきましたけど、やはり目指すところはグローバリズムで、バックはグローバルリスト達であると。そういうことを考えた時に、今、彼らの計画を進めている。やはり2025年を目処に例えば竹中平蔵が幅を利かしているダボス会議なんかはグレートリセットとかを仕掛けようとしているということだと思えますけども、そういった時に、やはり、そういった人達は、来年辺りに、一つは戦争ですね」

水島「うん」

稲垣「イスラエル・イラクの戦争、まあ、その前にはウクライナの戦争っていう形で、所謂、地政学で言うところのハートランドのロシアと、その辺の周辺地域ですね。リブランドと呼ばれる地域が紛争地帯になっていくということで、次に戦場にされる可能性が高まっているなあ、まあ、やっぱり日本だと思っています。そういった中で、もう一つは同じグローバル勢力であるWHOが来年にはパンデミックが起きるといふ犯行予告みたいなことをしていると。

そして、もう一つは先程、スマートシティが目標なんだということも話しましたが不思議なものです。スマートシティに予定されている所は大体、災害が起きていると。まあ、これ、まことしやかに言われていることですけどね。例えばハワイのラハイナもそうですし、能登半島もそうだと言われています。これは憶測とか、そういうことになりますけども、まあ、ひとつの可能性として、そういったシナリオが万博にも織り込まれていないかっていうことを、一つ考えておく必要があると思えます。

まずは、つまり延期であるとか中止であるやむを得ざる形で、そういった形っていうのも、彼らはそういったことをトップの人は考えている可能性っていうのは一つ、シナリオとして考えておかなければいけないんじゃないかなと思えます。でも、私達はいずれにせよ、本当に日本が危ない状況の中で国民として何かアクションを起こしていかなければいけない訳で、やはり我々新党くにもりとしては、岸田落選運動というのを広島でやっているのと同時に、大阪では、この大阪万博の杜撰な政策をてこに維新を何とか引き摺り降ろすと。そういった形でグローバル勢力を日本から駆逐していくっていう運動を、国民運動として起こしていく必要があると思っています。

そして一つの大きな政策として、やっぱり日本が自主独立する為には核武装は、どうしても避けて通れないということで、昨年大阪府知事選では統一地方選で、ちょっと場違いだと思った方もおられると思えますけど、核武装を初めて日本で公約として掲げて戦うというこ

とを始めた訳で、この大阪から日本を変えていくっていう思いでやっていこうと、決意新たにしているところです。はい。有難うございました」

水島「はい。有難うございました。はい、どうも。では、川端さん、お願いします」

川端「はい。すみません、今日、途中、抜けてしまいまして申し訳なかったんですけども、最後の方に議論されていたことは非常に重要な問題で、何か万博とかIRの枠を超えるような問題だったと思うんですけど、竹中平蔵さんとか維新の会とか、そういう人達に日本とか大阪が牛耳られているとすれば、それって多分、彼ら自身の問題もあると思いますけれど、日本人自体も何か価値判断の能力というか、そういうものが、年々、どんどん下がっていているんじゃないかなって、ちょっと気になってしまうんですよね」

水島「うん」

川端「今日は万博の回なので引きつけて言うと、1970年の大阪万博の時の『人類の進歩と調和』っていうコンセプトは、元々反文明みたいなコンセプトですよ」

水島「うんうん、うん」

川端「つまり1950年代、60年代っていうのは、先進国、何処も超高度成長期で、どんどん開発が進んで豊かになっていったんだけど、果たして、我々は、この主流派の波に乗っていていいんだろうかっていうことを1970年前後ぐらいに言い出した人っていうのが、ある程度、居て」

水島「はい」

川端「それを、言わば国家的イベントでバァ〜とぶちまけるっていうのが、あの時の大阪万博だったんですよ。しかも、そういうコンセプトで創られた大阪万博でも、未だ生温いとか言って、それを岡本太郎がぶち壊すっていうのが大阪万博の見どころで、要は丹下健三がデザインした巨大な屋根を貫く形で、今、太陽の塔という、未だに立っている巨大な像があって、実は、私、あの近くに一歳から住んでいるので、子供の頃、太陽の塔を見ながら育ったんですが、あれは、要するに、文明と言うか技術と言うかテクノロジーとか、そういう近代の主流派の価値観をぶっ壊す為に、岡本太郎が日本の縄文時代とか、そういう昔の土偶とかの時代の想像力を現代に蘇らせようとしてニョキッと凄いものを創ったっていう話ですけども」

水島「そうですね」

川端「それも、だから50年前の日本には、そういう何か主流派の流れに対して抗ってやろうっていうエネルギーがあったと。しかも、あの時は、岡本太郎は当時でも、大分、大御所でしたけれども凄い前衛芸術というか若手のクリエイターみたいな人がいっぱい居て、まあ、その後、有名になった人で黒川紀章さんとか磯崎新、まあ、若手とは言い難いかもしれないですけど、デザイナーのコシノジュンコさんとか、そういう後の日本を背負っていくような若いクリエイターを沢山、投入して、結構、攻めた、何て言うか世界に対して、やっぱり、いや、俺達は、こういう価値観で行くんだってことを発信しようとした面があったと」

水島「はい、ありましたね」

川端「ちょっと話が長くなりましたけど、それでね、最近、僕、最後に行った万博っていう

のは2010年の上海万博に遊びで行ったんですけど。あの時は勿論、日本館っていうのと日本産業館というのがあって、日本館はそもそも6時間位、並ばないと入れないので無理なので、日本産業館っていう日本が出していた二個目のサブのやつを見に行っただすよ。

それは、丁度、建物を設計していたのが、私の前に居た日本郵政グループっていうところの建築の人がやっていたので、それを一応、見に行っただすけど、それは、今から振り返れば、中の展示が、ちょっと良かったんですよ。というのは当時って、日本が万博で出し物を出すって言ったなら、例えば、トヨタの自動車とかホンダのロボットとか、そういう解り易い、今風の派手な技術を、日本館という方では凄く盛り立ててやっていたんですけど、それに、言わば対抗するような形で、もうちょっと日本の衛生とか医薬品とか今日、冒頭で製薬業界に対する批判がありましたけども、それはあるとして、何かね、ちょっとロハスっぽいついか、派手な技術じゃなくて日本人が考える良い暮らしっていうのは、例えば、まあ、清潔であるとか、ゆったりしている、可愛いとか、そういう別の価値観を提示しに行っている展示になっていて、それが優れたものだったかっていうとあれですけども、未だ何か考えてメッセージを発している感じがあったんですよ。ところが、そこから14年経って今回の万博になると、何か跡形も無く、そういうメッセージを発する力が失われたなっていう感じがしているんで、まあ…」

水島「そうですねえ」

川端「何と云うか、最初から言っている事の繰り返しであるんですけども、その維新とかの問題だけじゃなくて、我々自身が判断とかね、能力とか協力とか、そういうものを失っているんじゃないかという自己反省も含めて、我々の映し鏡だと思って、維新政治をもう少し受け止めたいなという風に思いました。長くなりまして、すみません、以上です」

水島「いやいや、全くその通りでね、縄文っていうのは、我々、本当に印象に残っていると思うんで、いやあ、私も思っているのは、やっぱり文明を売るのに関して、文化というものを、岡本さんは言いたかったっていうか伝統文化っていうか縄文の文化っていう、文明とは違うんだって、進歩して、とにかく良くなって行くっていう幻想をね、それにアンチテーゼを出したかったっていう感じが凄くしましたね。今の上海の万博の話も面白かったですね。はい。では、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。ごめんなさい。これを出すタイミングを失なっちゃったんで、今日、最後に、出しますけども、大阪のIRって、もう、それ以前の話で、もうちょっとあれなんですけど、要は、皆さん、IRって言うと、まあ、そもそもIRっていう言葉もおかしいんですけど、本当はこういうものですよ。コンベンション施設区域でコンベンションが主。ここで儲けるんです」

水島「うん」

室伏「色んな人が来ますよねと」

水島「うん」

室伏「そういう人の為に超高級から、まあ、安宿とは言わないですけど、色んなニーズに合うラグジュアリー・ホテルっていうやつですよ。それからレストランもそうですね。例えば横浜って、日本でのコンベンションだと、パシフィコ横浜が一番、稼働率、高いんですけど、あそこって、じゃあ、VIPが来たら、どうするかって言ったなら、あそこのホテルじ

や泊る所が無いんですよ。だから結局、高速を使って東京に行っちゃって食も全部、東京、銀座」

水島「なるほどね」

室伏「だから、結局、これがあると、お買い物もできますよねと」

水島「うん」

室伏「こういうコンベンションを巨大な見本市とか国際会議をやって、ちょっとエンターテインメントの為に、ここにくっついていて、そのエンターテインメントの一部にカジノがあるというのが、本当の位置づけなんですよ」

水島「本当のね」

室伏「そうです」

水島「I Rのね」

室伏「国際会議とか出られた経験があれば解ると思うんですけど、必ずエクスカージョンとか、あとは夫人同伴の場合、夫人は会議中、やることがないので、夫人を集めて One Day Trip をするとか、あるんですけど、要するに、そういう位置づけで、これが本当の姿です」

水島「うん」

室伏「実は、ラスベガスって、こうなんですよ」

水島「ああ」

室伏「ところが今、日本でやっているのは何ですかって言うと、これですね。特定複合観光施設で、カジノの収益でこっちをやりましていう話になっていて、だから、結局、これが付属品みたいになっていて、今、大阪で進められているのって多分、これ、やりですけど、多分ね、国際的な会議とか大規模見本市とか展示をやるようにはなっていないと思います」

水島「だから、さっき言ったね、水道も電気もね」

室伏「はい」

水島「とっても、そんなんじゃ、だから立派なホテルなんか建てられないでしょ」

室伏「いや、ですから、そうなると無理ですね。レストランも、高級レストランも、とても、もう、これは無いから（笑）、ですからねえ」

桜田「32件っていうかな、そういう基準を満たした国際会議があるんですけども、その内の29件までは学会の会議なので、学会に来る先生方がカジノするの？っていう根本的な問題がありますよね」

室伏「はい。はいはい。そうです」

出原「確かにそうですね」

室伏「それで、おかしいっていう話で言うと、これですけどね、今、特定複合観光施設なんです。これ、観光なんですかって言うと、思い出して戴ければ、観光に関係ないじゃないで

すか」

水島「まあ、そうだよね」

室伏「勿論、アメリカ人って、この部分だけの為に行く人も居ますよ。だけど殆ど基本的に来ている人は、こっち側のコンベンションの為に行っていますから、だから、結局、観光とか関係ないはずですよ。それが、そもそも観光ってついている段階で日本のIRって、おかしいんですよ。統合リゾートっていう名前が。ちなみにラスベガスってね、どういう話になっていますかって言うと、ラスベガスの Convention and Visitors Authority っていうところ、そこが、何故、ラスベガスでコンベンションを開催すべきと考えているかって言うと、要するに、宿泊施設もありますよね。コンベンション施設、これね、全米トップ10のあれが3つぐらいがあって、とにかく凄いと。

うちでやったら、お客さんをお呼んでも参加率が高いですよ。毎年9%ずつ参加率が増えているんですよ。空港も車で15分ぐらいの所にあつて、アメリカ国内も海外の都市も含めて、1100の都市に飛んでいますから、それぐらい空港のアクセスがいいと。コンベンション・サービスは非常に高いプロフェッショナルがいると。好立地っていうのもありました。空港とホテルが凄く近いんですよ。更に、こちらですね。すみません、ちょっと時間が無いので、駆け足になっちゃいますが、天候は365日の内320日は晴れていますから、非常に使い易いですねと。あと、この施設自体も、この8番目ですけど、もう徒歩圏にあるし、歩いてもいいし、歩くのが駄目な、ちょっと辛い、荷物がつて言うんだったら、バスもタクシーも、あと、今、地下鉄もあるんですね。

だから、そうやって公共交通をその狭い中でも徹底的に重視させるということをやっていると。公共交通、そういう時にやるのは誰がやりますかって言うと、これ、ちゃんと広域自治体がお金を出してやっていますから、儲けの為じゃなくって利便性を高める、アメリカでもそうですからね」

水島「なるほどね」

室伏「アメリカで委託をする場合の対象は民間企業じゃなくて、日本で言えばNPO、Non Profit Body がやります。これは意外と知らない人、多いと思うんです。そして様々なニーズに対応したレストラン、これは本当にケータリングから超高級までありますよと。そして10番目が自分達の話をしているんですけど、我々プロフェッショナル集団が居ますから、皆さん、安心して下さいと。ここにカジノってありますか。一言も無いです。これが本当のコンベンションです」

水島「まあ、ラスベガスは一番、典型的で代表的なね…」

室伏「そうです。だからラスベガスって本当に、正にこういう都市であつて、カジノは本当に付属品ですね。だから、そういう現実を知らない人が本当に多いと思うんですけど、ええ、カジノを推進して、元々推進法とか作つて、僕にも相談していた僕の昔の上司が言っていますからね。日本のはおかしいと。

本当は、このモデルじゃなきゃいけないのに、日本はなつてないから、おかしいって、推進側が言っていますからね（苦笑）」

水島「いやいや、これも大事な話ですよ、本当はIRっていうのがね」

室伏「そう。だから、それが、いかに日本の維新と日本政府の一部が進めているIRなるものがおかしいか、歪だっということがお解り戴けると思います」

水島「よく解ったけどねえ、う～ん」

室伏「だから、これ、本当に皆さん、是非、こういう事実を知って戴くことで、あんなもん、やめちまえと。そんな為の万博だったらやめちまえというかね、これ、特に大阪の方々にも是非、知って戴きたいと思いますし、これもね、ごめんなさい、今、凄い駆け足になっちゃいましたけど、キャプチャーで、どんどん拡散して下さい」

水島「そうですね。日本の言っているIRは違うっていうことだね」

室伏「全然、違います。はい」

水島「はい」

室伏「これで、僕、繰り返し言いますが、IRの推進法を作った僕の元上司が言っていましたから（笑）」

水島「ああ～…いや、それと、もう夢洲で、そんなこと出来る訳が無いっていうね」

室伏「はい」

水島「100%言えますよね」

室伏「まあ、土地的にも無理ですね。はい」

水島「無理ですね」

室伏「私、そういう関係もあったので、別の場所でも相談を受けたんです。ここ、どうですか、いいですか。ここはインフラがありますか。ガス、電気、水道、ありますかって、無いです。じゃあ、無理です。まず、それをやってからにしましょうって言って諦めて貰いました（笑）」

水島「その通りですね。本当にその通りですよ。はい、有難うございます。では、出原さん、お願いします」

出原「はい。今、室伏先生がおっしゃったように、このIRっていうのは勿論、日本語に直せばカジノを含む統合型リゾートですよ」

水島「うん」

出原「でも、松井さんは、この賭博の売り上げで教育も医療も福祉もやりますって言っていますよね。繰り返しですけども、この前、私、IR説明会に行ったら、その話をしないですよ。でも、実際、何故、IRって言うんですかと。もうカジノって書いて下さいと。維新さんはカジノを含む統合型リゾートって、横文字、好きじゃないですかと」

水島「うん」

出原「もうちょっと解り易く書いて下さいよという風なことを言ったことがあるんですけども、やっぱり、現実おっしゃっているよりも、この概念とか歴史的な経緯からも全部、解らずに、もう、ただ乗っかって、外資にやって貰おうと、あとは利鞘ね、15%貰おうという

考えなので、そういう発想になると思いますし、南港にありますインデックス大阪。かなりの国際会議場がありますし、何だったら中之島の方にも大きなグランキューブがあるんですけども、こちらの国際会議場は小さいですよ。

だから、今回、大阪のこのIRっていうのは国際会議場としては全く認められていないというか、残念なことになると思います。今回、万博もテーマだっていうことですけども、維新さんにも向けてもそうですし、国民の方にもね、私が思うのは、つまりキューピーの社訓にあるんですけども、道義を重んじて創意工夫に務めようっていうような言葉があるんですけども、結局、こういった大きな国家イベントをする時に於いても、やはり、この目先の損得を考えるのではなくて、本当に何が正しいのかっていう判断基準をもって、そして創意工夫しながらパイオニア精神を持って事に当たらなければいけないという日本人古来のね、持っている精神を、もう一度、思い起こさないと、もう、どんどん、やられていくんじゃないかっていう風に思いますので、今一度、こういったことをね、この万博が無くなる方がいいです。

はっきり、これ、言いながらも、何故かと言うと、能登半島地震で苦しんでおられる方が、いらっしゃるので、まずは、そちらに全力を注いで、そのあとではないかと思しますので、今日は、本当に有難い機会を戴きましたので、一言、添えさせて戴きました」

水島「はい、どうも有難うございます」

出原「有難うございます」

水島「では、あんどうさん、お願いします」

あんどう「はい。先程の川端先生の話聞いていて思い出したんですけど、自民党の中に、確か文化GDPを拡大するような議連っていうのがあったんですよ」

水島「文化GDPってあるんですか」

あんどう「文化GDPって何ですかっていう感じだと思うんですけど（微笑）」

水島「それを聞きたいんだけども（笑）」

あんどう「まあ、分かり易く言えば、例えば大阪で言ったら、仁徳天皇陵を電飾しようみたいな話が前にあったんじゃないですか」

水島「馬鹿かっていう（笑）」

あんどう「ありましたよね（笑）」

水島「ありました」

あんどう「だから、要するに、そういう文化遺産があるでしょ。これを金に換えようという」

水島「うん、それがGDPですか」

あんどう「そうそう。要するに金に換えて、GDPに加算しようぜっていう」

水島「ああ」

あんどう「そういう考え方の議連があるんですけど（笑）」

水島「凄い奴らだな（笑）」

あんど「馬鹿々々しい議連があるんですけどね（笑）」

水島「そういう議員の名前を知りたいね」

あんど「いや、今もあるのかどうか分かりませんが、要するに、そういうのが、まあ、仁徳天皇稜を電飾してしまうみたいだね」

水島「ああ」

あんど「要するに、そういうものに対する恐れが無い」

水島「無いですねえ」

あんど「敬意っていうものが無い訳ですよ。それで、今日のインフラが無いっていう話ね。万博もそうだしIRもそうだけど、インフラが無いっていう話がありますけれど、これ、共通すると思うんですよ。どういうことかって言うと、そういう土台を作ってくれる人に対する感謝が無いんですよ」

水島「ああ、そうですね」

あんど「うん、当たり前にあるものだって思っちゃうんですよ」

水島「う～ん」

あんど「もう黙っていても電気もガスも水道も通っていると。トイレが無いなんて考えられない。あるでしょ、普通になって思っちゃうんですよ」

水島「そうなんですな」

あんど「でも本当は、やっぱり、そういうものを創ってくれる人が本当は大事で、そういう人が居なかったら何も出来ないんですよってことだし、この文化もそうじゃないですか。もう昔からの何千年もかけて出来上がって来た文化があって、その積み重ねの上に、我々は生かされているんだと。生かして戴いているんだと。我々は本当は、そういう思いで暮らしていかなきゃいけないし、積み上げて下さったものを、より良い物にして次の世代に引き渡していかなきゃいけないっていうのが、我々の使命だと思うんですけども」

水島「そうですね」

あんど「もう、そういうのが無いと文化GDPで金に換えろとか、何も考えなくてもインフラって出来ているものだろう、俺がやれって言ったら、やるんだよ、みたいになっちゃうんじゃないかなあと思うので」

水島「う～ん、なるほどねえ」

あんど「やっぱり、そういうところの先祖に対する恐れとか、そういう土台を作ってくれる人に対する感謝というものが完全に欠落して、ただ権力を持つことのみを目的にする集団が維新の会に代表されるところであり、或いは、菅さんを中心とする今の権力者ということなのかなっていう風に思いました」

水島「そうですねえ。はい。正に今だけ、金だけ、利権だけのね」

あんどう「そうですね」

水島「やっぱり、今言った仁徳天皇稜のもね、そうですね、やっぱり、そういう意味での文化っていうのを、先週の討論ですけどね、実は、日本の治水、堤防の9割以上が江戸時代に全部、造られている」

あんどう「ああ」

水島「明治以降は、その修復ということだけであって、江戸時代までの人達が封建制度だ何だと言っていているけれども、本当は日本のインフラで一番、川とかそういうものをやってくれている。こういうことを、今、言って戴いて思い出したんですけど、そういうものに対する感謝もないし、あの夢洲の使い方に、よく表れていると思うんですけど。桜田さん、お願いします」

桜田「室伏さんの話で思い出したことありましてね、ちゃぶ台返しみたいな話になって恐縮ですけど、カジノを認定する時の審査基準と評価基準っていうのがありましてね」

水島「はい」

桜田「あの審査基準はどうなっていたかと言うと、カジノ以外の中核施設を審査する」

水島「え？」

桜田「カジノは審査の対象になっていないですね」

水島「ああ、そうなんですか？それは凄いなあ」

桜田「うん。カジノ施設以外の中核施設、即ち1から5号施設ということで、室伏さんが示された本来のIRは、こうなんですよという、そこを審査するということに、すり替わっていたんですね」

水島「酷いな」

桜田「ですからね、あの夢洲のカジノですけども収益計画が無いんですよ」

室伏「え？」

桜田「無いんです。あのビジネスが成立するっていうのは、銀行がお金を出しているから、大丈夫なんだっていう話と」

水島「うん」

桜田「それから、カジノ事業者の方は何かと言えば、所謂、単なる見込み額を掲示しているばかりで4933億円の粗利が上がりますと。それを平均的な利子で割り引けば6兆円とか7兆円という賭博を組織しなければ4933億円のお金が上がって来ない。だったら、それはどうやったら可能なんですかっていう話については一切、口を噤んだままです」

水島「そうなんですよ」

室伏「(頷く)」

桜田「ええ」

水島「いやいや、いや」

桜田「そういう計画に対して三井住友銀行と三菱富士UFJは5500億円を融資するという話で、調達の方になって来ると、これは川端さんに聞いたかったですけれども、様々な、その財務的なテクニックを使いながら殆ど自前の資金を創らないで、あたかも無から有を、生まれるような形で資金を生み出して、それで運用するんだという形になっている。

つまり名目上は2千億円、MGMがお金を出すことになっているんだけど、実質的には、殆ど自腹を切らずに、なんせ2兆6千億円の借金を持っていますから、そういうところですからね、そんな計画になっているんだっていう…」

水島「ああ、その問題、そういう話ですもんねえ」

桜田「ええ、ええ。だから本当にそのIRっていう形でカジノを日本社会に持って来て大丈夫なのかっていう話については国会の方でも、それから事業者の方でも銀行の方でも、一切、Don't Touchなんでねえ」

水島「う～ん…」

桜田「そういう計画だっていうことを、今、室伏さんの話で思い出しました。以上です」

水島「いやあ、正に文化GDPですね、これねえ」

一同「(苦笑)」

水島「インチキな、でもハッキリ一言で言うと、庶民的に言うと、それって詐欺っていうね」

桜田「そう(苦笑)」

水島「そういう感じですよねえ(失笑)、簡単に言うとねえ。いやあ、こういうことが公然と今…」

出原「あのう、いいですかね」

水島「はい」

出原「あその夢洲自体は担保にならない訳ですよ」

桜田「SPCだから…」

出原「担保にならないです、だから銀行は本当は貸せないはずなんですよ」

水島「う～ん、ですよねえ」

出原「一時、メガバンクが貸さないって言っていたって聞いたことがあったんですけど」

桜田「担保は売上なんですよ」

出原「ね、売り上げなんですよ、結局、そういうことですよね」

桜田「そのカジノの売上ですよ」

出原「これが、要するに先の…」

桜田「その売り上げに対して、そうそう、きちんとしたデータが無いという、そんなところに本当に金融機関はお金を貸していいのというね」

水島「いや、全くそうですよ」

桜田「その問題が、やっぱり出ているんですね」

水島「大体、大阪の人達も、或いは関西の人達を含めてね、態々夢洲に渡ってカジノで賭博をしたいと思うかどうか、USJなら行きたいと思うかも分かんないけどね。いくらなんでもねえ、今の話は凄いなあ」

桜田「凄まじいんです」

水島「凄まじい話です」

桜田「(頷く)」

水島「皆さん、どう思われたでしょうか。私も今日、IRとか夢洲の土台構造ということも聞いてね、これ、絶対にやっちゃいけないことですよ」

桜田「そうです」

出原「いけません」

水島「はい」

桜田「許してはいけないことです」

水島「そうですよね。はい。こういうようなことが、我々の中で進められているということでもあります。皆さん、今日は、遅くまで有難うございました」

一同「有難うございました」

***** お わ り *****